笠利町文化財報告第18集

宇宿貝塚東地区（ダンベ山）

～ 一般地方道佐仁・万屋・赤木名線埋蔵文化財包蔵地に伴う発掘調査 ～

1993年３月

笠利町教育委員会

撮影・ランドサット

資料提供・東海大学情報技術センター

報告書抄録

フリガナ	ウシュクカイヅカヒガシチク				
書名	宇宿貝塚東地区（ダンベ山）				
副書名	一般地方道佐仁万屋赤木名線埋蔵文化財包蔵地に伴う発掘調査				
巻次					
シリーズ名	笠利文化財報告				
シリーズ番号	第18集				
編集者名	中山清美				
編集機関	笠利町教育委員会				
所在地	鹿児島県大島郡笠利町中金久141				
発行年月日	平成5年3月31日				
フリガナ	ウシュクカイヅカヒガシチク				
所収遺跡名	宇宿貝塚東地区（ダンベ山）				
フリガナ	カサリチョウウシュク				
所在地	鹿児島県大島郡笠利町宇宿				
調査期間	1992～1993（整理期間も含む）				
調査面積 ㎡					
調査原因	道路拡張工事に伴う				
出土遺物・遺構	主な時代	主な遺構	主な遺物	出土量	
	グスク時代 13世紀	葺石 (山全体が遺構)	青磁 （猫描文）	1点	
			人骨	2体	
			表採資料 葺石に利用された石器・貝	ケース1箱	

宇宿貝塚東地区
（ダンベ山）

序　　文

県道拡張工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査が行われましたが、特に宇宿地区は遺跡の立地密度が多い地区であります。文化財の保護活動につきまして、当教育委員会は現在国指定である宇宿貝塚の環境整備の計画を進めているところでございます。大島支庁土木課から道路拡張の計画が明らかにされ宇宿貝塚がその計画に入っており、びっくりいたしましたが、再々の協議の中で貝塚部分は保護されることになりました。国指定である宇宿貝塚の近くですので、新たに拡張される場所も発掘調査を行うことにいたしました。県教育委員会・大島支庁土木課には、文化財保護行政を進める町の立場を理解いただき深くお礼申し上げます。また調査期間中に熊本大学白木原和美教授、青山学院大学田村晃一教授、人骨の調査をなさった鹿児島大学歯学部の先生方より多くの御教示を頂きました。　宇宿校区の方々からも力強い御協力を頂きました。尚、本書が今後の文化財保護の一助として活用されることを願っております。

1993 年 3 月

笠利町教育委員会
教育長　**染　　光　義**

本　文　目　次

報　告　書　抄　録
序　　文

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
第２章　遺跡の概要
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 3
　第２節　砂　丘 …… 5
　第３節　遺跡の概要 …… 12
　第４節　層　序 …… 13
　第５節　植　生 …… 16
第３章　宇宿貝塚東地区（ダンベ山）の調査
　第１節　遺　構 …… 15
　第２節　遺　物 …… 22
第４章　調査の成果と問題点 …… 27
第５章
　付　篇　奄美群島遺跡地名表 …… 29

挿　図　目　次

第１図　黒潮海流図 …… 4
第２図　南島文化圏区分図 …… 4
第３図　奄美群島の遺跡分布図 …… 付図
第４図　笠利町の遺跡分布図 …… 7
第５図　遺跡周辺地形図 …… 11
第６図　調査区域位置図 …… 12
第７図　層　　序 …… 14
第８図　葺 石 遺 構 …… 17～18
第９図　葺石遺構断面図 …… 19
第10図　第 2 号 墓 …… 20
第11図　第２号墓人骨出土状況 …… 20
第12図　第１号墓人骨出土状況 …… 21
第13図　西区調査範囲図 …… 21
第14図　Ａ２区出土青磁 …… 22
第15図　葺石に利用された石器 (1) …… 23
第16図　葺石に利用された石器 (2) …… 24
第17図　葺石に利用された石器 (3) および葺石内出土貝製品・青磁 …… 25

表　目　次

第１表　笠利町の遺跡地名表 (1) …… 8
第２表　笠利町の遺跡地名表 (2) …… 9
第３表　奄美大島本島遺跡地名表 (1) … 29
第４表　奄美大島本島遺跡地名表 (2) … 30
第５表　奄美大島本島遺跡地名表 (3) … 31
第６表　喜界島遺跡地名表 (1) …… 32
第７表　喜界島遺跡地名表 (2) …… 33
第８表　徳之島遺跡地名表 (1) …… 33
第９表　徳之島遺跡地名表 (2) …… 34
第10表　沖永良部島遺跡地名表 (1) … 35
第11表　沖永良部島遺跡地名表 (2) … 36
第12表　与論島遺跡地名表…… 36

図　版　目　次

図版１　遺跡調査前全景
図版２　発掘区域調査前全景
図版３　葺石遺構全景 (1)
図版４　葺石遺構全景 (2)
図版５　葺石遺構内遺物出土状況
図版６　第１号墓全景
図版７　第２号墓全景 (1)
図版８　第２号墓全景 (2)
図版９　発掘調査風景 (1)
図版10　発掘調査風景 (2)･Ａ２区出土青磁
図版11　葺石遺構内出土遺物 (1)
図版12　葺石遺構内出土遺物 (2)
図版13　土盛集落入口遺跡確認調査

例　言

1. 本書は、平成３年度・４年度に実施した一般地方道佐仁・万屋・赤木名線に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査「宇宿貝塚東地区」および土盛地区確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は、大島支庁土木課が県教育庁文化課と協議し、笠利町教育委員会が依頼を受けて行った。
3. 報告書作成のための出土遺物整理には、高梨　修、田畑一哉の協力を頂いた。
4. 本書の編集・執筆は中山清美が行った。
5. 本書で用いたレベル数値は、絶対海抜高である。
6. 出土遺物は、笠利町歴史民俗資料館において管理・保管を行っている。
7. 人骨については、鹿児島大学第２解剖室において当分の間管理・保管をお願いする。

第1章　調査の経過

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

1988年に奄美空港が開港し、それに伴う道路拡張工事が行われるようになった。当初、宇宿貝塚の範囲内に道路拡張が予定されたため、その協議で大島支庁土木課が笠利町教育委員会を訪れた。宇宿貝塚は1986年10月に国指定になっており、指定区域内には１㎝の拡張も許されない旨を伝えた。その後県教育庁文化課、大島支庁土木課、町教育委員会と路線計画の変更を含めて協議が行われた。結果として宇宿貝塚区域内には拡張せず、対面する警察官舎を移動することになった。官舎の移動に伴い、隣接する北側砂丘部分を整地する計画になった。この部分は全体的に宇宿貝塚と同一の砂丘と思われることから、発掘調査の必要が生じた。県教育庁文化課の指導で発掘調査に入ることになったが、年度末でもあり、発掘調査は終了しても報告書作成は年度明けになることから、大島支庁土木課と協議して２年度にわたる事業として合意した。その間、土盛地区の遺跡の有無についても確認調査を行うことにし、本調査とあわせて行った。その結果、土盛集落南側には遺跡は確認されなかった。

第２節　調査の組織

発掘調査

調査主体者	笠利町教育委員会	教育長	染　光義
調査責任者	〃	社会教育課長	南　隆光
	〃	課長補佐	別府良美
		〃	勢　利久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	主　査	中山清美

発掘調査指導助言者

熊本大学文学部教授	白木原和美
青山学院大学文学部教授	田村　晃一

報告書作成

調査主体者	笠利町教育委員会	教育長	染　光義
	〃	社会教育課長	南　隆光
	〃	課長補佐	別府良美
	〃	〃	勢　利久
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	主　査	中山清美

調査員	笠利町文化財調査員	高梨　修
〃	笠利町文化財調査補助員	田畑一哉

調査指導助言者

熊本大学文学部教授	白木原和美
青山学院大学文学部教授	田村晃一
鹿児島県考古学会長	河口貞徳
鹿児島県立埋蔵文化財センター	長野真一
沖縄県北谷町教育委員会	中村　愿
沖縄県立博物館	当真嗣一

その他鹿児島県大島支庁土木課、笠利町役場、沖縄県教育委員会、鹿児島県教育委員会の協力を得た。

〈発掘作業〉

川畑　テツ　坂下ヨチコ　山下　綾子　谷元　広子
中村貴美代　竹　今　恵　徳　えみ子　中山美智代
石川　典子（明治大学）

〈整理作業〉

川畑　テツ　坂下ヨチコ　中村貴美代　竹　今　恵
前田ヒサコ　泉　扶代子　中山美智代

第2章　遺跡の概要

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と環境

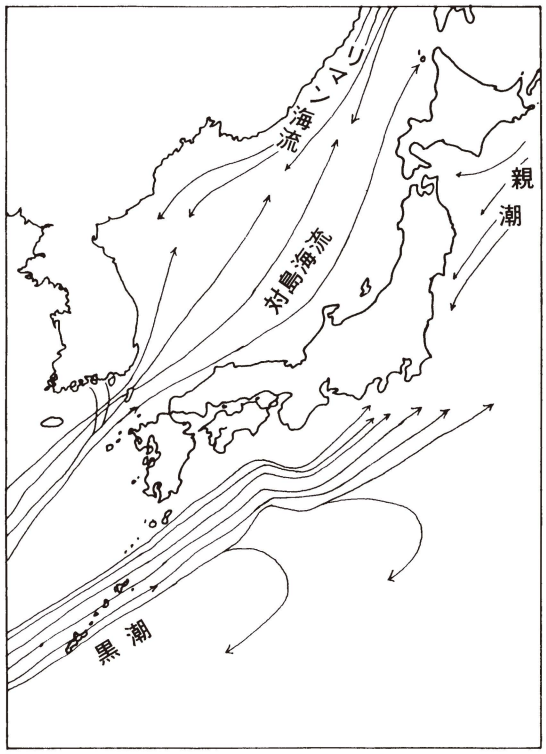
鹿児島から台湾にかけて弧状に連なる島々、有人・無人の島々はおそらく数・百島になろうこれらの島々が黒潮海流の真中に見えかくれしている。台湾の南方に発流して北上する黒潮は、地球の大道脈の如く幅約200km・水深約1,000ｍ・水温約15℃以上・時速約８km という大潮流であり、弧に連なる島々を抱き、日本列島まで暖かく包み込んでいる。この黒潮が昔から富をもたらし、新しい文化を乗せて北上し、その流れの反流で北からの文物も乗せてくれた。我が南島はまさに北の文化、南の文化、大陸の文化をこの黒潮の影響で与えられて来た。まさに「黒潮文化」であろう（第１図）。

南島を国分直一は三つの文化圏に区分した。トカラ以北を北部文化圏、奄美・沖縄を中部文化圏、八重山以南を南部文化圏として、その文化の相違によって区分している[注1]（第２図）。中部文化圏にあたる奄美・沖縄諸島は、先史時代から類似する土器文化を持ちながら、その共通性と相違点については未だ具体的に明らかにされてない部分が多い。近年になってようやく考古学的立場からの調査が行われ始めた奄美では、まさに九州本土と沖縄の谷間となっていた学間の一部を埋めようとする作業がようやく始まったと言えよう。

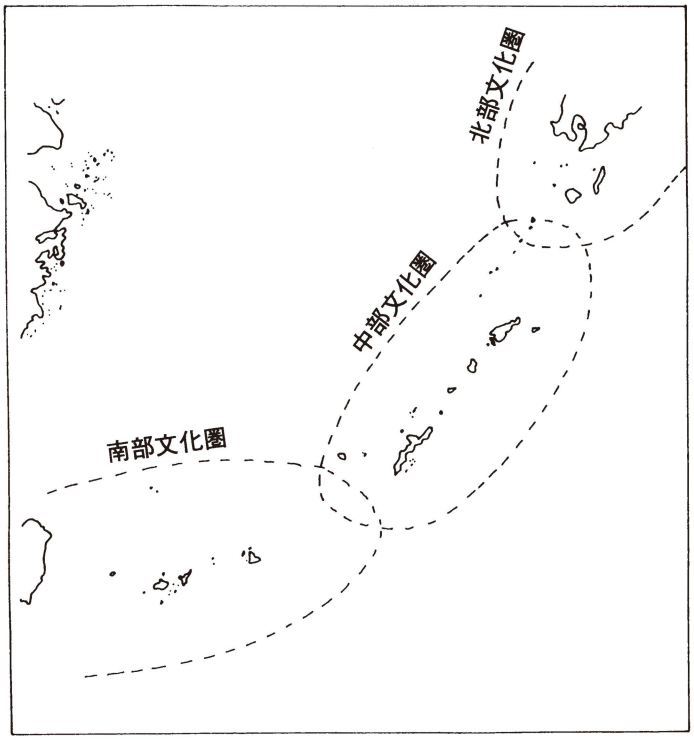
この奄美諸島は５つの主島から成り、喜界島・大島・徳之島・沖永良部島・与論島がそれにあたる。大島本島南部にも加計呂麻島・与路島・請島があり、遺跡も確認されている。これらの島々を「奄美」とか「大島」とか呼んでいるが、国土地理院では「奄美諸島」として全体を呼んでいることからここでは「奄美」を奄美諸島の呼び名にし、「大島」は大島本島を指す呼び名としたい。

奄美の中でも特に徳之島・大島・喜界島に遺跡が集中しており、なかでも大島本島北部の東海岸は遺跡群を成している感さえある（第３図）。遺跡も旧石器時代の可能性の高い喜子川遺跡[注2]、国指定の宇宿貝塚[注3]、砂丘に立地するマツノト遺跡[注4]、長浜金久遺跡Ⅰ・Ⅱ[注5]・Ⅲ[注6 7]等々が発掘調査されている（第４図）。時代も旧石器時代から12～13世紀までのグスク時代までを含めると、100を超す遺跡になる。ただし、グスクについてはまだ完全な分布調査が行われてないため、その数は不明である。グスクは各集落近くに１～３ケ所は所在していることから、今後の調査が注目されるところである。

これらの遺跡が所在する笠利町は大島の中でも最北端に位置し、南北約15km、東西約4.5kmの細長い半島を成している。半島は南北に伸びる高岳・大刈山・淀山等からなり、ほぼ中央を東西に分ける地形になっている。この最高峰の山でも183.6ｍ（高岳）であり、半島全体は大島本島の中でも比較的平地が多いのが特徴である。



第１図　黒潮海流図



第２図　南島文化圏区分図

半島を東西に分けるこの山脈には、「アマンデー」と呼ばれる天孫降臨最初の地があり、女神アマミコ・男神シニレクの二神が「シマ」づくりをしたという伝説がある。アマンデーの山にはこうした伝説を伝える碑があり、明治34年に節田地区民等によって石碑が建立されている。その他にも武運長久を祈る石碑も建立されており、この山が天孫降臨最初の地として、また神山として信仰されていることが窺える。

笠利半島の海岸線は東海岸と西海岸に大きく分けられ、その地形から各集落の生活・文化にもそれぞれの個性が残されている。東海岸と西海岸では漁法にも違いがあり、リーフを中心にした漁法と干潟を利用した漁法などがある。東海岸は発達したリーフ・発達した砂丘・広がる後背温地から緩やかに大刈山・淀山へと続く地形であり、そしていくつかの小河川が発達した砂丘を分断して海へと流れている。各集落は海岸寄りの発達した砂丘の後方に位置している。現在は集落後方の低温地と緩やかな平地が畑地総合計画で整地され、大規模な畑地と化している。これに対して西海岸は大刈山・淀山・高岳から急峻に海に続く地形である。集落は山々に三方囲まれた形で谷間部に広い干潟を有し、前面（海側）が砂丘となる。そしてその砂丘のはずれより比較的大きな川が流れている。現在の集落はこのように湾入した大小の地形を利用し、海岸側に限られている。これは大島全体の特徴でもある。

第2節　砂　丘

砂丘の形成については、縄文時代の遺構・遺物が沖積層の中に存在することがこれまでの調査で明らかになっている。[注8]「沖積層」と呼ぶのは、最終氷期の最寒冷期に海水準の低下に伴う下刻によって形成された不整合面を覆って堆積した地層で、今から約2万年前から1万8,000年前にかけてのことだという。[注9]日本では「沖積世」「洪積世」という用語が使われているが、旧石器時代の研究及び第四紀研究の地質年代区分の用語ではあまり使われていないのが現状だろう。これはMantell（1822）による定義以来永い間、ドイツ語で呼んで来たことに由来する。現在ではLyell（1830）やOsborn（1915）によるPleistoceneが一般的に用いられている。

砂丘形成時の沖積層の基本層序は、サウチ遺跡でも確認されたように、下位より下部砂泥互層・中部海成粘土層・上部砂層の順に重なる。これは竜郷町手広遺跡にも例を見ることが出来る。ただし、年代的には地域や地形によって違ってくるので、全体的にこの層位が鍵層になるとは思えない。鍵層としての重要な役割を果す土層はAT火山灰層で、AT火山灰層は不合面直下の更新統最上に狭まれている。喜子川遺跡の層序結果が奄美では唯一確認されているものである。

古環境変遷のなかで重要な出来事は、気候の温暖多雨化とそれに伴う海水準上昇であり、最終氷期の最寒冷期には海水準が100m以上も下降している。この影響は奄美ではかなり

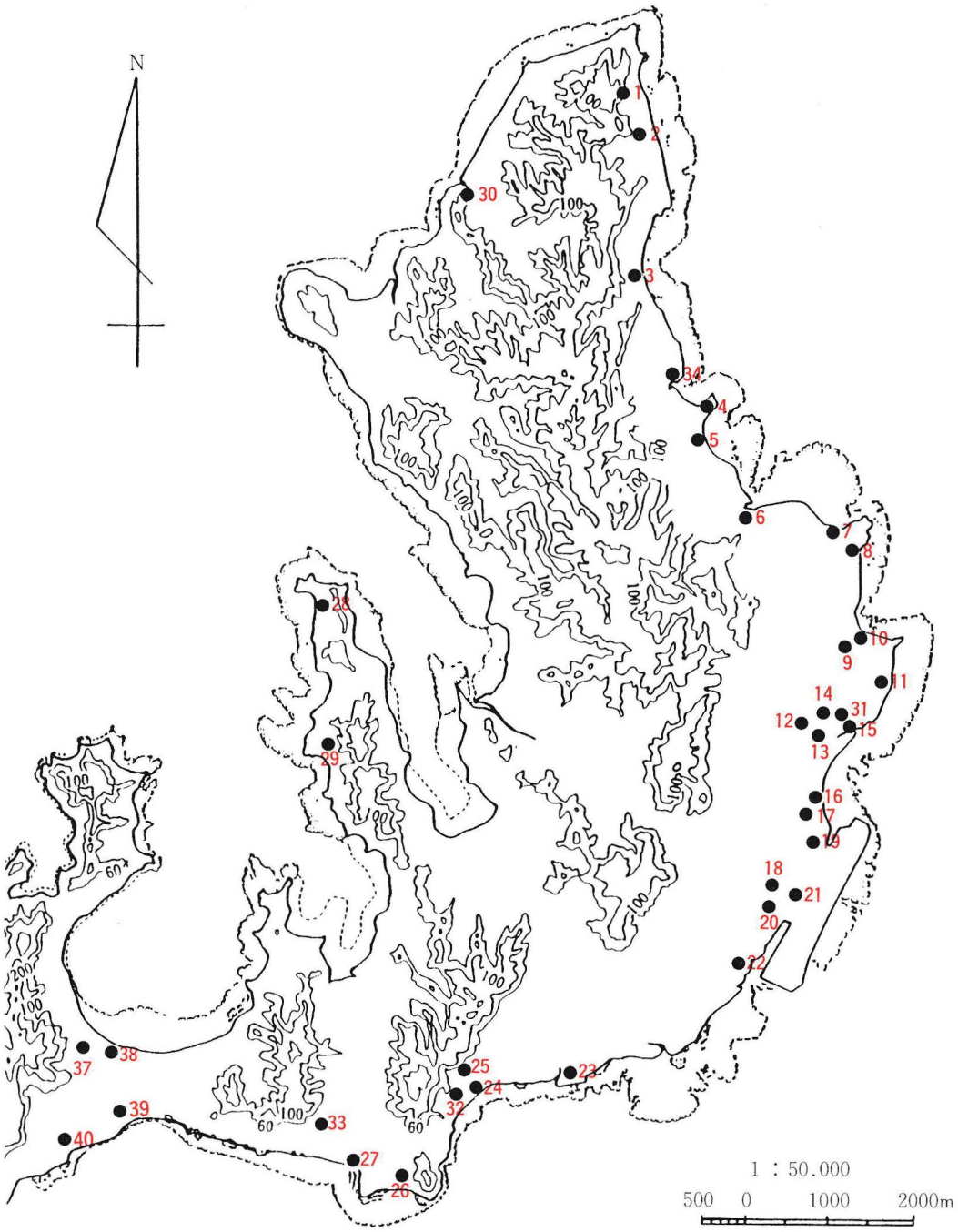
大きくなり、南部の加計呂麻島から徳之島までは陸続きになっていただろう。これは日本でも同様で瀬戸内海等は広大な内陸盆地となっており、縄文海進の海水はこの内陸盆地を内海に変え、さらに山間盆地も内海に変えている。これがいわゆる縄文の海進・海退で良く言われているところである。

現在よく論議される環境考古学の視点からは、低湿地と砂丘地及び全体的な地形から考察して行われるべきものと理解する。奄美においては、リーフと湾入した低湿地・砂丘・砂丘背後にある低湿地等を含めた環境を考察しないと、後の弥生期に本格的に起こる砂丘形成のとらえ方に問題を残すことになろう。奄美における遺跡の立地も、湾入した周辺部分に位置することからも理解出来る。特に宇宿貝塚周辺の地形がそうである。宇宿港遺跡・宇宿小学校遺跡・宇宿高又遺跡・宇宿貝塚等は、いづれも湾入した周辺台地の砂丘上に形成されている。砂丘の新旧にもよるが、このような遺跡の分布状態は奄美の先史人達の海への依存度が高かった結果と思われる。もちろん島全体が海に囲まれているので外洋との接触は多かったであろうが、山中及び赤土に形成される遺跡が大島本島では少ない。そのほとんどが砂丘遺跡である。ただし貝殻などの自然遺物が検出されない遺跡も、サモト遺跡等[注10]にみられるように二、三例はある。

砂丘の層位は、その堆積層をしっかり観察しないと砂丘形成時期を見失ってしまう危険性を含んでいる。人工遺物と自然遺物、また一群の型式が同時使用を示す層序等の自然環境等を復元しながら、遺物包含層をとらえていくことは必至であろう。長浜金久遺跡[注11]では貝を採集し、投棄された貝だまりが検出されている。これらは決して同時投棄ではなく、一定の時期幅として考えられるだろう。砂丘全体に広がる貝殻が同時に投棄されたものでなく、一定期間をもって投棄されたその状況がわかるということである。砂丘遺跡にはそのような出土状況から、遺物共存関係も良く観察し易い。しかし砂丘の移動や遺物の浮沈等もあることから、前述したように砂丘全体の形成を把握することが必要であろう。

奄美においては、発達したリーフと砂丘、砂丘でも古砂丘・新砂丘・現砂丘と大別出来る。これらは出土遺物からも時代差がはっきりしている。[注12] 喜子川遺跡においては砂丘中にアカホヤ火山灰層も含まれており、その上層に爪形文土器を出土する遺物包含層がある。[注13] 砂丘形成上西側は堆積が薄く、東側（海岸側）においては２ｍをこえる砂丘の堆積が見られている。

注1～7　地名表作成、奄美文献参照
注 8　笠利町教育委員会「サウチ遺跡」1978年
注 9　那須考悌氏より教示
注10　熊本大学考古学研究室「サモト遺跡」1984年
注11　鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」1985年
注12　笠利町教育委員会「節田湊金久・万屋下山田遺跡」1991年
注13　喜子川遺跡調査団「喜子川遺跡」1988年



第４図　笠利町の遺跡分布図

第１表　　笠利町遺跡地名表 (1)

番号	遺跡名	所在地	備考
1	用見崎遺跡	笠利町用見崎	
2	用長浜遺跡	笠利町用長浜	
3	用遺跡	笠利町用安良川	
4	辺留城遺跡	笠利町辺留良川	
5	辺留窪遺跡	笠利町辺留窪	笠利町文化財報告No.6
6	コビロ遺跡	笠利町須野コビロ	〃
7	あやまる第２貝塚	笠利町須野大道	〃　No.9
8	あやまる第１貝塚	笠利町須野	
9	喜子川遺跡	笠利町松ノト	笠利町文化財報告No.13.14
10	マツノト遺跡	笠利町松ノト	〃　No.17
11	土盛遺跡	笠利町土盛	
12	宇宿小学校遺跡	笠利町宇宿	
13	宇宿高又遺跡遺跡	笠利町宇宿高又	笠利町文化財報告No.2
14	宇宿貝塚	笠利町宇宿大龍	〃　No.3国指定
15	宇宿港遺跡	笠利町宇宿港	〃　No.4
16	万屋遺跡	笠利町万屋	
17	万屋下山田遺跡	笠利町万屋下山田	笠利町文化財報告No.16No.12
18	万屋泉川遺跡	笠利町万屋泉川	
19	ケジ遺跡	笠利町万屋ケジ	〃　No.6
20	長浜金久第２貝塚	笠利町長浜金久	鹿児島県教育委員会報告書No.32
21	長浜金久第１貝塚	笠利町長浜金久	〃
22	ナビロ川遺跡	笠利町和野ナビロ川	
23	立神遺跡	笠利町節田	
24	土浜遺跡	笠利町土浜	
25	イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴遺跡	笠利町土浜イヤンヤ	1973年三島格、永井昌文調査
26	明神崎遺跡	笠利町用安入瀬	
27	用安遺跡	笠利町用安入瀬	
28	サウチ遺跡	笠利町喜瀬字サウチ	笠利町文化財報告No.1

第2表　　笠利町遺跡地名表 (2)

番号	遺跡名	所在地	備考
29	鯨浜遺跡	笠利町喜瀬字鯨浜	
30	佐仁遺跡	笠利町佐仁	
31	宇宿貝塚東区	笠利町宇宿	笠利町文化財報告No.18
32	土浜ヤーヤー遺跡	笠利町土浜	鹿児島県教育委員会報告書No.47
33	湊城遺跡	笠利町用安	
34	笠利ウーバル遺跡	笠利町笠利ウーバル	
35	宇宿戦浜遺跡	笠利町宇宿	笠利町文化財報告No.15
36	節田湊金久遺跡	笠利町節田	笠利町文化財報告No.16
37	赤尾木保育所遺跡	龍郷町赤尾木	
38	赤尾木遺跡	龍郷町赤尾木	
39	ウフタ遺跡	龍郷町赤尾木ウフタ	熊大考古学研究室活動報告No.12
40	手広遺跡	龍郷町手広	

〈地名表作成、奄美文献〉

1．三宅宗悦　「南島の先史時代」『人類学先史講座10』雄山閣　1941年

2．河口貞徳　「南島の先史時代」『南方産業科学研究報告』第1巻2号　1956年

3．国分直一・河口貞徳・曽野寿彦・野口義磨「奄美大島笠利宇宿貝塚発掘報告」『奄美の自然と文化』九学会連合奄美大島共同調査委員会　1959年

4．永井昌文・三島　格「奄美大島ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌』2号　1964年

5．『笠利町郷土誌』笠利町　1973年

6．中山清美「名瀬市の先史学的所見」『薩琉文化』8号　南日本文化研究所　1976年

7．笠利町教育委員会『サウチ遺跡』笠利町文化財調査報告書　1978年

8．笠利町教育委員会『笠利町高又遺跡』笠利町文化財調査報告書2　1978年

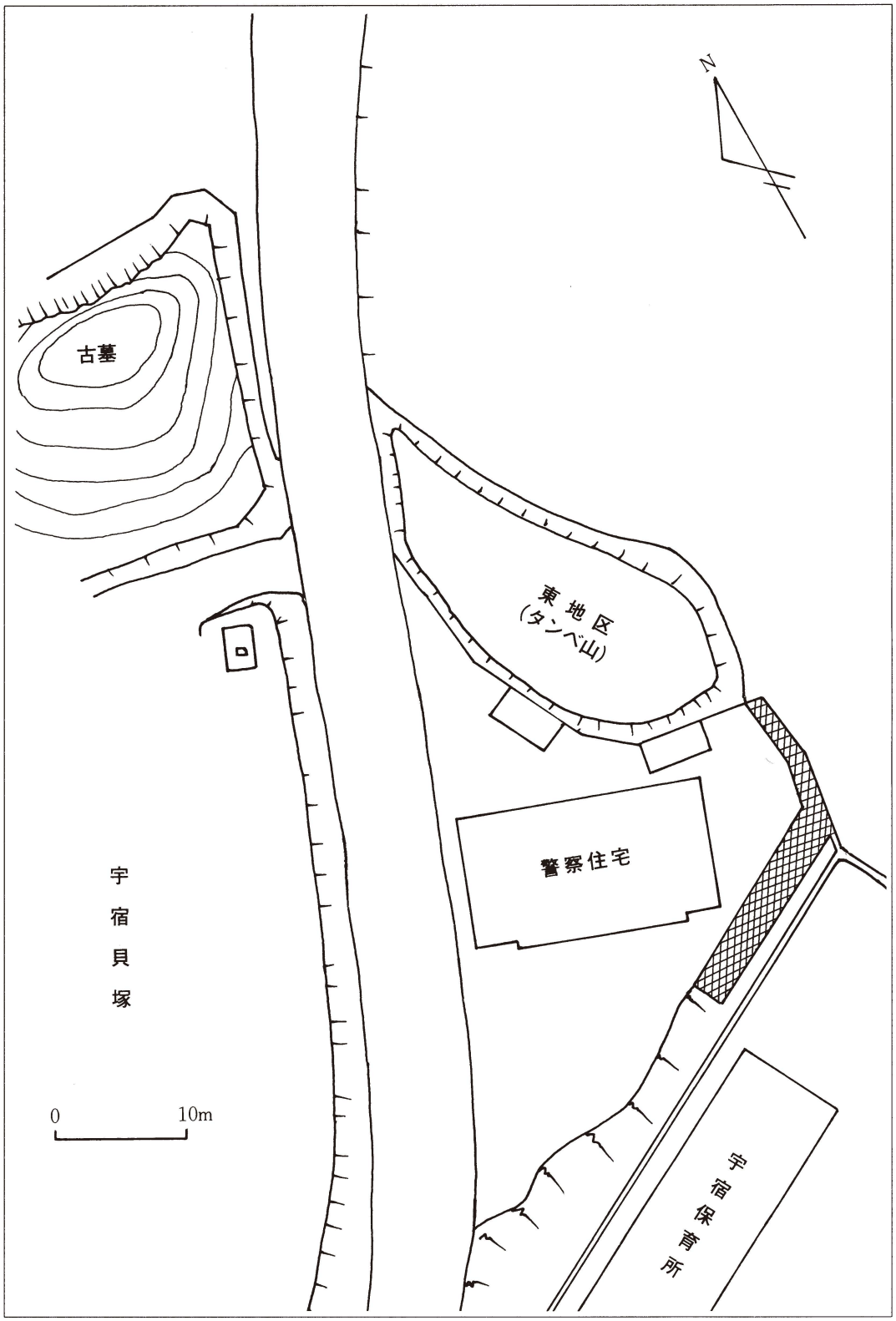
9．笠利町教育委員会『宇宿貝塚』笠利町文化財調査報告書3　1979年

10．中山清美「奄美大島の先史遺跡」『南島史学』17・18号　1981年

11．笠利町教育委員会『宇宿港遺跡』笠利町文化財報告書4　1981年

12．中山清美「先史時代の装飾品、奄美の島じま」『郷土のくらしと文化』新星図書出版　1981年

13. 中山清美「奄美における弥生時代相当期の資料紹介」『赤れんが』創刊号　熊本大学 1981年
14. 笠利町教育委員会『ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡』笠利町文化財報告書5　1983年
15. 中山清美「兼久武土器〔Ⅰ〕」『南島考古』8号　1983年
16. 笠利町教育委員会『あやまる第2貝塚』笠利町文化報告書7　1984年
17. 中山清美「フィリピン、バタン島調査記」『笠利町歴史民俗資料館報』館報第2号 1984年
18. 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32　1985年
19. 笠利町教育委員会『城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡』笠利町文化財報告書8　1986年
20. 鹿児島県教育委員会『ケジⅠ・Ⅱ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38　1986年
21. 鹿児島県教育委員会『泉川遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書39　1986年
22. 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡（第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡）』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書12　1987年
23. 中山清美「奄美のグスク」『日本考古学論集』9号吉川弘文館　1987年
24. 中山清美「韓国調査記」『笠利町歴史民俗資料館館報』　第5号　1987年
25. 鹿児島県教育委員会『長浜金久遺跡（第Ⅱ遺跡）』鹿児島県埋蔵発掘調査報告書461988年
26. 鹿児島県教育委員会『土浜ヤーヤ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書47　1988年
27. 中山清美「面縄前庭式土器」『日本民族文化の生成』　永井昌文先生退官記念論文集1988年
28. 中山清美「グスク龍郷町」『奄美考古』創刊号　1988年
29. 中山清美「奄美大島における古墓」『奄美考古』創刊号　1988年
30. 中山清美「龍郷町の先史時代」『龍郷町史』　1988年
31. 田村晃一・中山清美他『喜子川遺跡』喜子川遺跡調査団　1988年
33. 中山清美「奄美大島の箱形石棺墓」『アジアの巨石文化』六興出版　1990年
34. 笠利町教育委員会『節田湊金久・万屋下山田遺跡』笠利町文化財報告書13　1991年
35. 中山清美「奄美大島における爪形紋土器」『奄美考古』2号　1991年
36. 谷川健一・山下欣一編『シンポジウム南島文学発生論』三一書房　1992年
37. 中山清美「奄美と先島」『日本の古代』角川書店　19991年

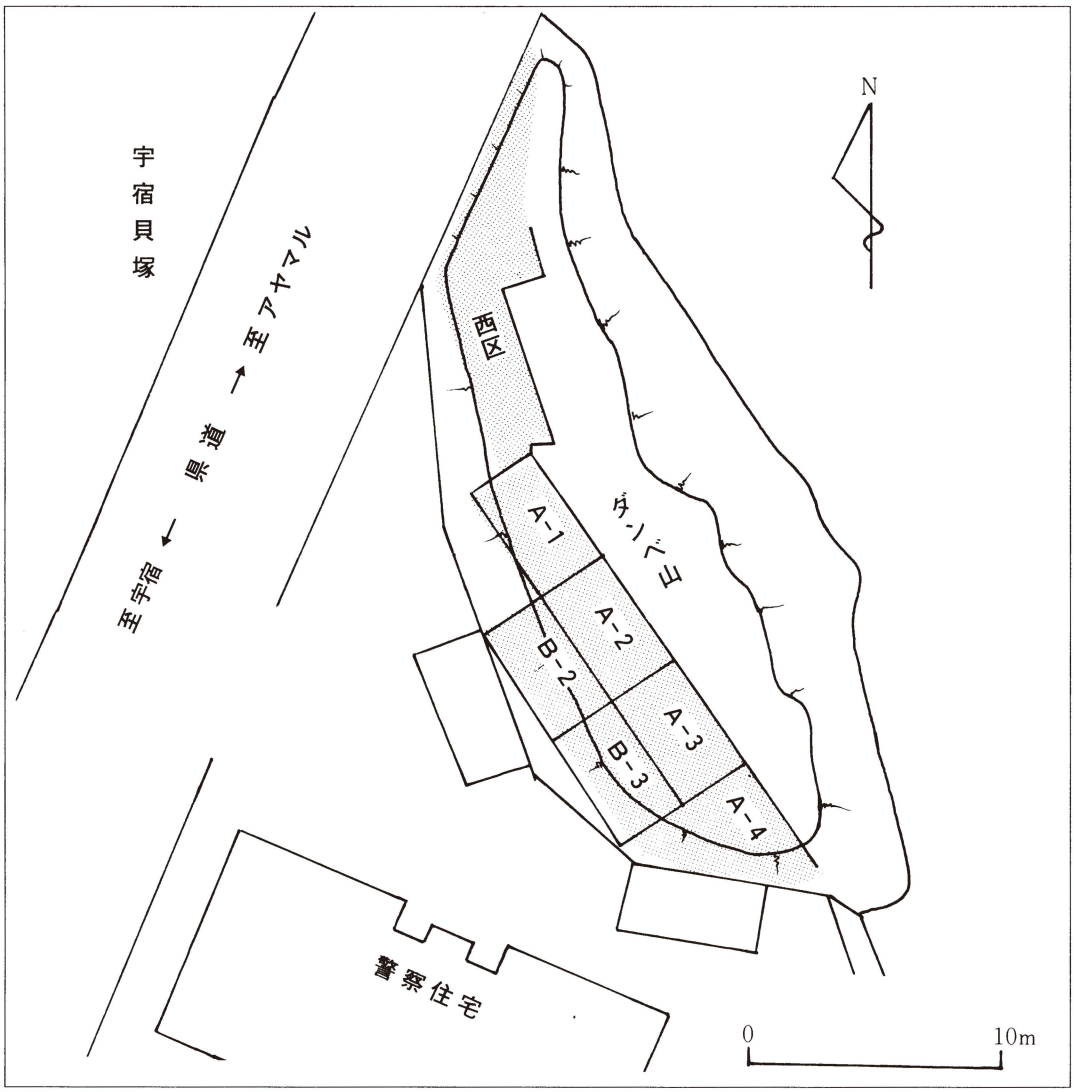


第5図　遺跡周辺地形図

第３節　遺跡の概要

宇宿貝塚は昭和８年に三宅宗悦によって発見された。[注14]その後昭和30年に九学会連合によって本格的な発掘調査が行われている。[注15]そして昭和53年には町教育委員会が国指定に伴う発掘調査を行っている。[注16]その後貝塚は昭和61年10月7日に国指定になる。現在、指定された砂丘台地状部分の区域内は平成４年度で公有化がなされ、保護されている。

当遺跡は宇宿貝塚を形成する砂丘の東側部分にあたり、通称「ダンベ山」と呼ばれている場所である。「ダンベ」とは方言で呼んでいる植物のことである。砂丘部分はソテツ・クワの木等がありその上を「ダンベ」と呼ばれるつたが覆っていた。ソテツやクワの木はかなり大きな大木であり、住民の方々もこの「山」には入りたがらない場所だという。奄美に棲という小妖怪「ケンムン」が出没する場所だと信じられているからである。



第６図　調査区域位置図

また民間信仰の場所でもあり、この「山」には天から神が降りて来たと言われ「テンザシの神」が祭られ、近くには「アストイズン」（有水源）があり、拝所にもなっていた場所である。

ゆかり地であるこの場所にはこのような伝説等が残っており、人手が入らなかったと思われる。宇宿貝塚とは道路（県道）を隔てた東側に位置することから東地区とした。これまで遺物の表採もなく、遺跡がどうかも不明であった。隣接する南側は宅地になっており、昭和53年の宇宿貝塚の調査時に確認を行ったが、既に畑地として整備されていたため、遺物包含層は確認されていない。ただし、このダンベ山だけは旧地形を残しており、宇宿貝塚と関連する資料の出土があると思われた。

調査を進めている間、地区の古老からも話を聞くことが出来た。この場所は前述したとおり、「神山」として地区の人々は信じており、足を踏み入れることはなかったという話ばかりである。宇宿貝塚北側に近世の箱形石棺墓があることや、ダンベ山東側の一段下がった畑地のはずれに泉があり、この泉が「アストイズン」と呼ばれ、神の祭に使われる泉であることから、このダンベ山は拝所である事を確認した。今回の調査は、民俗学的調査でなく考古学的調査であるため、「人間の行為に基づく物質界のあらゆる変化」[注17]を研究するのが目的であった。できるかぎり人間行動を復元して、物質文化に示された思想を再現するのが考古学研究であるから、埋蔵されている物質文化を確認するために発掘調査を行った。

注17　V・Gチャイルド『考古学の方法』1956年

第4節　層　序

東区（ダンベ山）の層序は全部で4層確認され、先史時代の遺物包含層は含んでなかった。ただしⅡ層とⅢ層からは人骨を出土している。

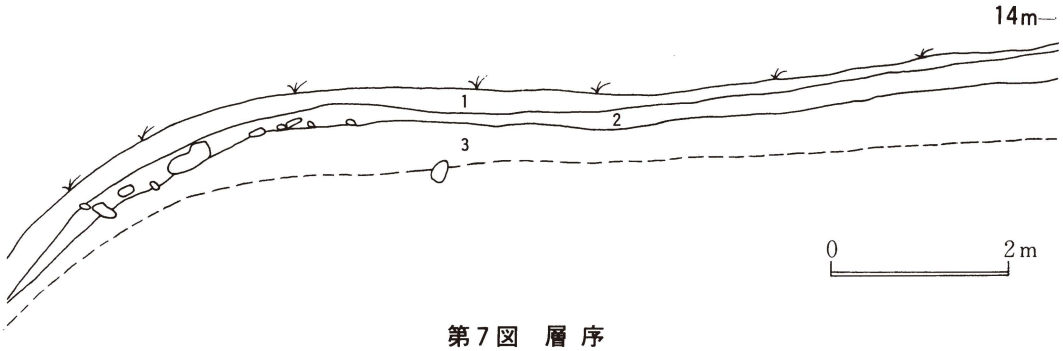
Ⅰ層(表土層)……　全体が木の枝や落ち葉で覆われており、砂丘全体を包んでいる。その下層に褐色層があり、動物（ネズミ）糞やマイマイ・ミミズの糞等が木の根やソテツの根などに集中している。

Ⅱ　層……　褐色層砂層で部分的にソテツの根による撹乱を受けている。Ⅱ層中から第1号墓を検出しており、ダンベ山周辺を帯状に葺石遺構が巡る。青磁片も数点出土する。

Ⅲ　層……　白砂層で部分的に石が入っているが無遺物層である。ただしⅢ層が掘り込まれた状態でサンゴに覆われた第2号墓が出土している。他の共存遺物は確認出来なかった。

Ⅳ　層……　やや粒子の粗い砂で白砂層である。下層はクール状をなす無遺物層。

ダンベ山はやや独立した砂丘を成し、砂丘北側部分の畑地は赤土である。このことから砂丘部分だけが丘を成している地形である。先史時代の遺物としては、砂丘全体を巡らすと思われる帯状の葺石遺構の中から石器等が検出されている。これらの石器は2次的利用によるものでダンベ山に関する遺物ではない。ダンベ山に関する遺構は、Ⅱ層全体が拝所であるととらえられる。Ⅱ層とⅢ層は、砂粒子の違いと土色がやや乳白色にⅢ層がなっているという程度の相違である。



第7図　層序

第5節　植　生

ダンベ山の主な植生は下記の通りである。

・ソ　テ　ツ	Cycas rerolvta Thunb	方言名	スティツ
・オオイタビ	Ficus pumila L	〃	ダンベ（ダンブェ）
・タラノキ	Aralia elata secmm	〃	タラギ
・ヤ　ッ　デ	Fatsia japonica Denc, et planch		
・ハゼノキ	Rhus succedaea L	〃	ハジムギ
・ト　ベ　ラ	Pittosporum tobira Dryand ex Ait	〃	トブラギ
・ササバサンキライ	Smilax nerro-marginato Hoy	〃	サンキラ
・クワズイモ	Alocasla odora spach	〃	バジィ
・ク　　ワ			クワァギ

以上特に目立った植物だけであるが、その他ボクソウは道路側にあった。主としてソテツ・オオイタビ・クワである。

第３章　宇宿貝塚東地区（ダンベ山）の調査

第３章　宇宿貝塚東地区（ダンベ山）の調査

第１節　遺　構

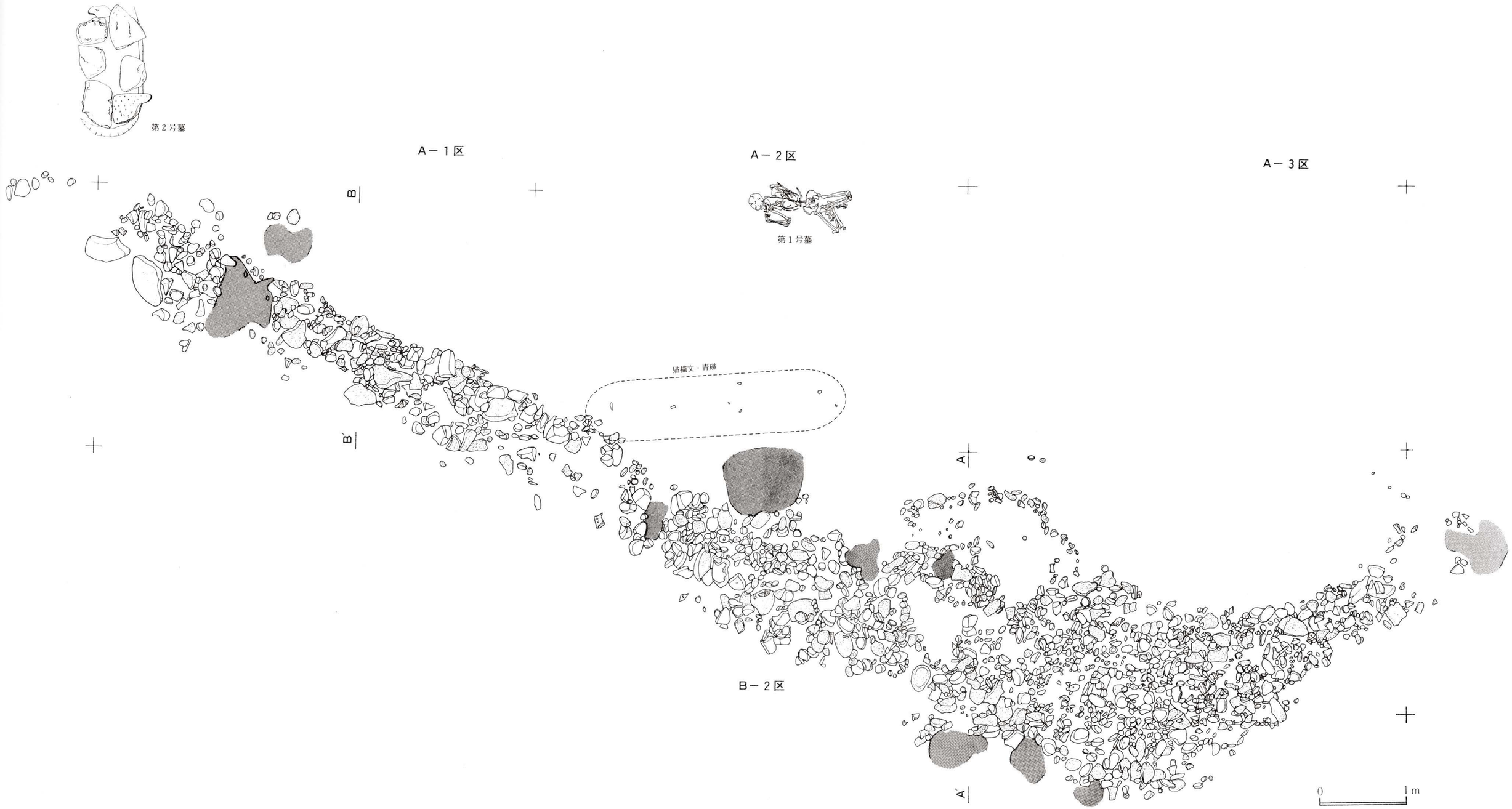
今回の調査では、このダンベ山全体が聖地として使われていたことが判った。ダンベ山は、北西から南東に舌状に伸びた地形を成している。ダンベ山全体は、最長部で約38ｍ、幅が約14ｍである。発掘調査は、ダンベ山の西側と北西から南東に伸びる砂丘の南西部分の約半分が対象になっており、西側は西区トレンチとし、南東に伸びる砂丘の南西部分は、北東から南西にＡ・Ｂ・Ｃ……、北西から南東に１・２・３……を冠したグリッドを設定した。

Ａ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｃ３区からは、ダンベ山を囲むように葺石遺構が検出されている。葺石遺構は調査区域の南西側に確認されているが、ほぼ全体に巡らされていると思われる。南西側ははっきり残っているが、北東側はダンベ山が部分的に畑に整地されているため、葺石は残っているかどうかは不明である（調査区域外）。葺石遺構はＢ３区で幅が2.5ｍと最も広く、徐々に狭くなっている。葺石遺構の中には貝殻や石器・貝玉等の遺物も混入しており、宇宿貝塚周辺にあった石器類が葺石遺構に使用された可能性が高い。ダンベ山が砂丘のため、砂丘の崩壊を防ぐために敷いたのかは不明であるが、帯状に石が人為的に敷かれて砂丘が区画されていることから、聖地としての何らかの遺構であることは間違いない。

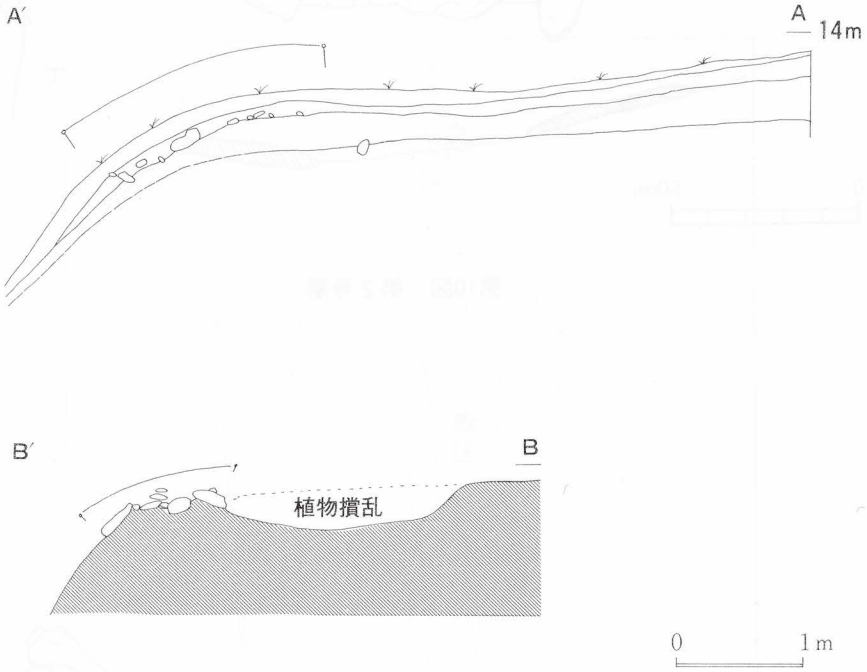
Ａ２区からは人骨が出土している。人骨は成人男性で、埋葬状態は頭部を北西にし、顔を南に向け、手足を曲げた状態の埋葬である。はっきりした掘り込みは確認されてなく、Ⅱ層下部からの出土である。人骨の保存状況はあまり良くない。頭骨はやや黒ずんでおり、骨は全体的に脆い。この人骨を第１号墓として扱う。その他に調査区域外から人骨の一部が発見されたが、埋め戻して保存処置を行った。

西区は南西側調査区と同様に葺石遺構が続いているが、ソテツの根やクワの木の根に抱きかかえられた状態である。葺石遺構西側は石の残りが悪く、散乱している状態である。また葺石遺構遺構西側は県道で一部が切られているため、規模は不明である。

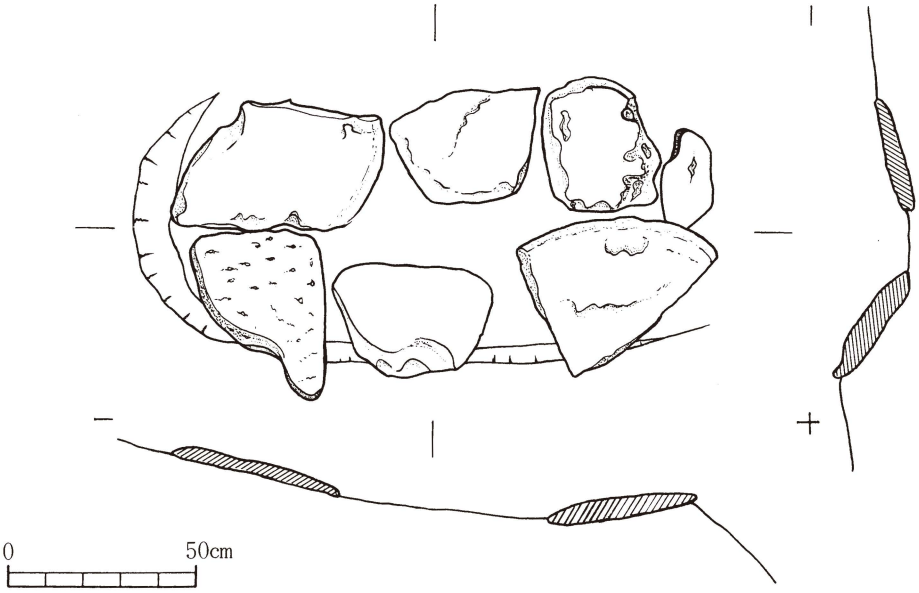
西区からは板状のビーチロックがほぼ方形になって出土した。ビーチロックは中央部分に落ち込みがあり、中には人骨が埋葬されていた。この遺構を第２号墓とする。また第２号墓はⅢ層を掘り込んでおり、埋葬後ビーチロックを上に乗せた状態である。埋葬状態は頭部を南西に向けた屈葬である。第１号墓に比べ、骨もしっかりしている。第１号墓・第２号墓はⅡ層に分かれることから時間差があると思われるが、どれ位の時間差であるか共存遺物がないため不明である。



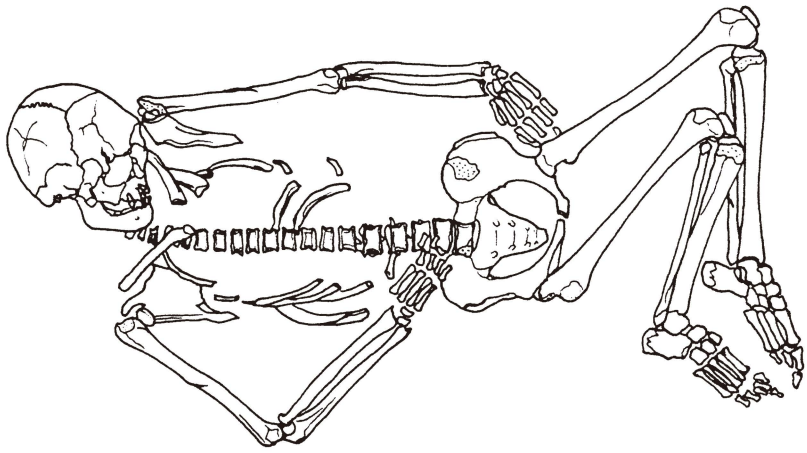
第8図　葺石遺構

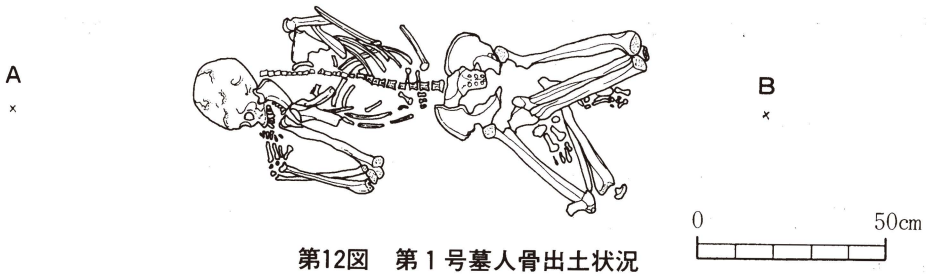


第９図　葺石遺構断面図

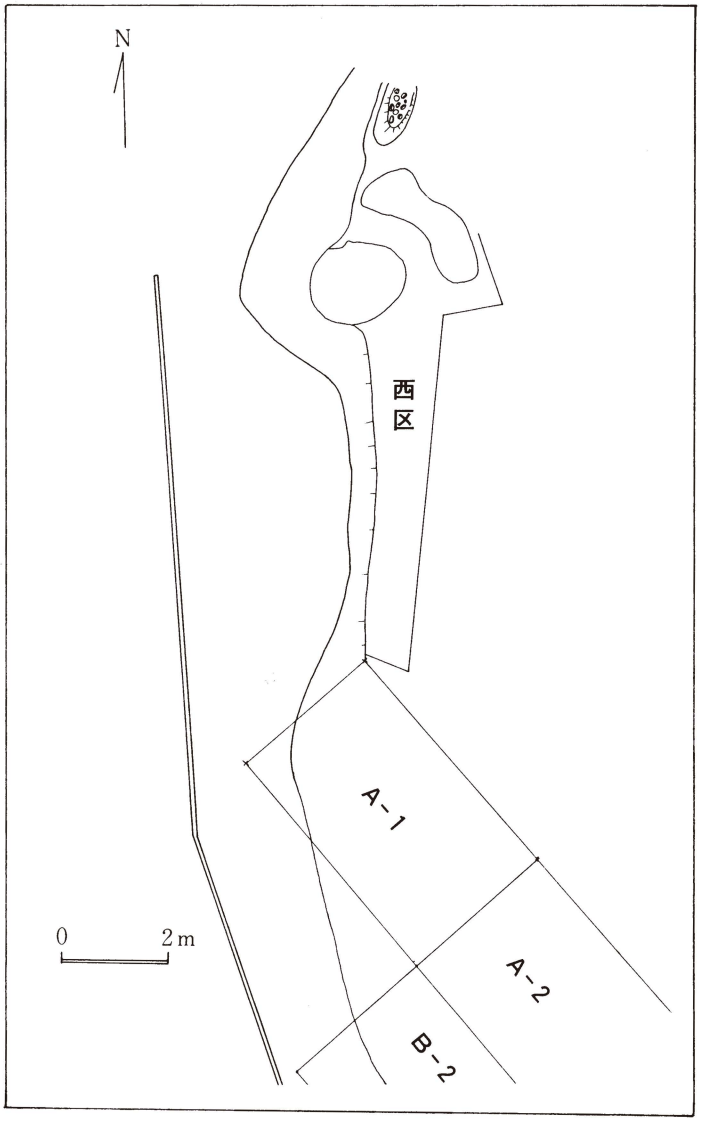


第10図　第２号墓





第12図　第１号墓人骨出土状況

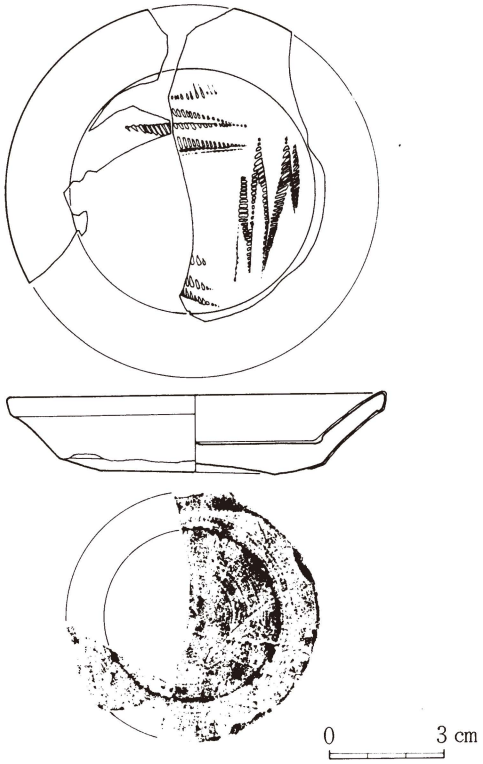


第13図　西区調査範囲図

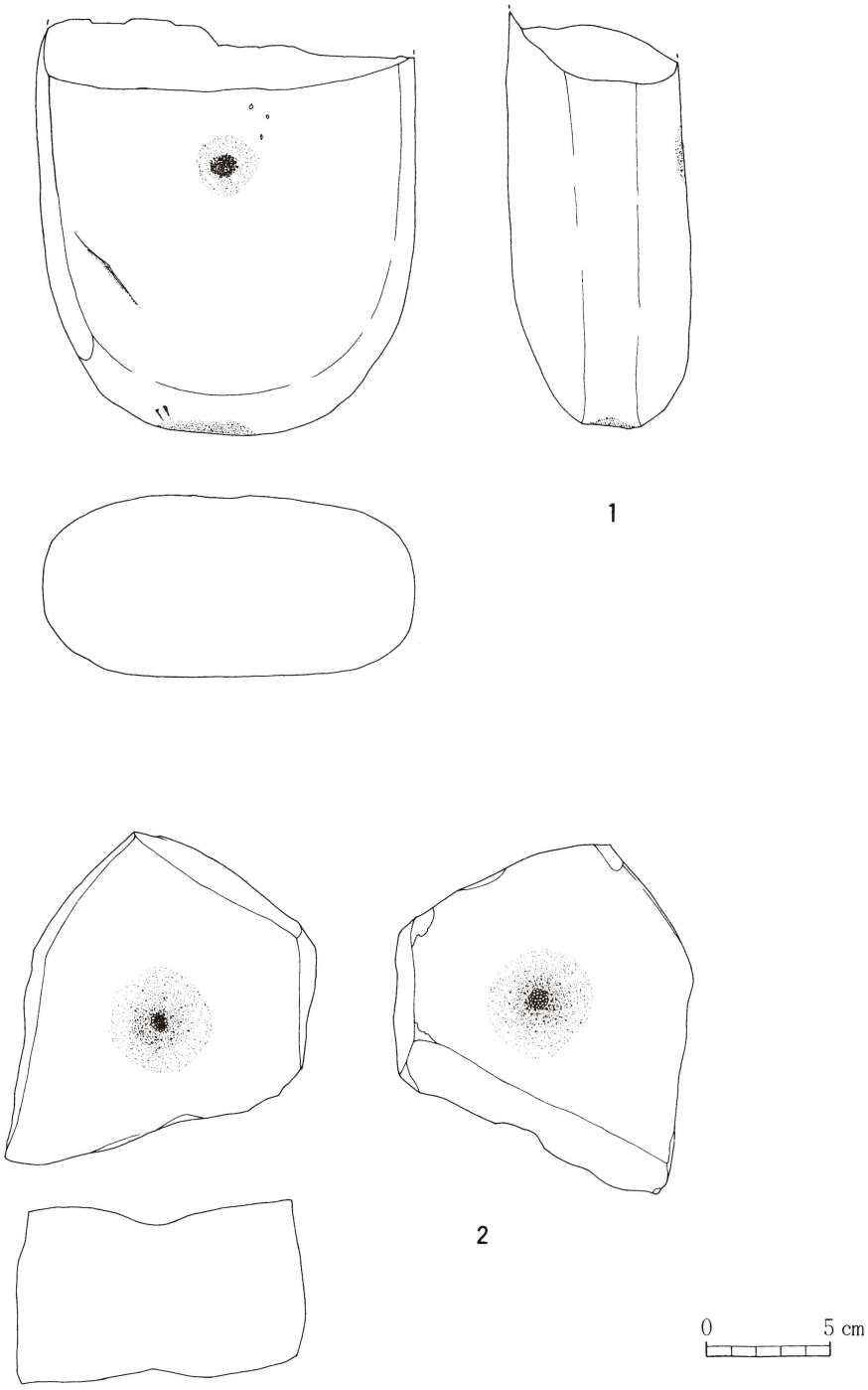
第２節　遺　物

出土遺物は、葺石遺構内に含まれる遺物を合わせると石器がかなりの数になるが、ダンベ山のⅡ層に伴う遺物としたならば青磁片が７点だけである。Ⅲ層からの遺物はなく、Ⅱ層から出土した青磁片のみになる。青磁片７点（第14図）は第１号墓と葺石遺構の中間（Ａ２区）から出土しており、第１号墓と同時期と思われる。青磁片は同一個体で、２ｍ内に破片が散らばって出土した。復元した結果、皿状の青磁であり、底部にまでは釉がかからずヘラ削り痕が見られる。復元図では口径9.8cmで、高さが1.8cmである。内面底には数本単位の引っかき文で文様が構成されており、いわゆる「猫描文」（櫛描文）の青磁である。猫描文青磁は沖縄では出土例が知られているが、[注18]奄美での出土例はおそらくはじめての例であろう。猫描文青磁の時代については12世紀末から13世紀のものだろうと言われている。

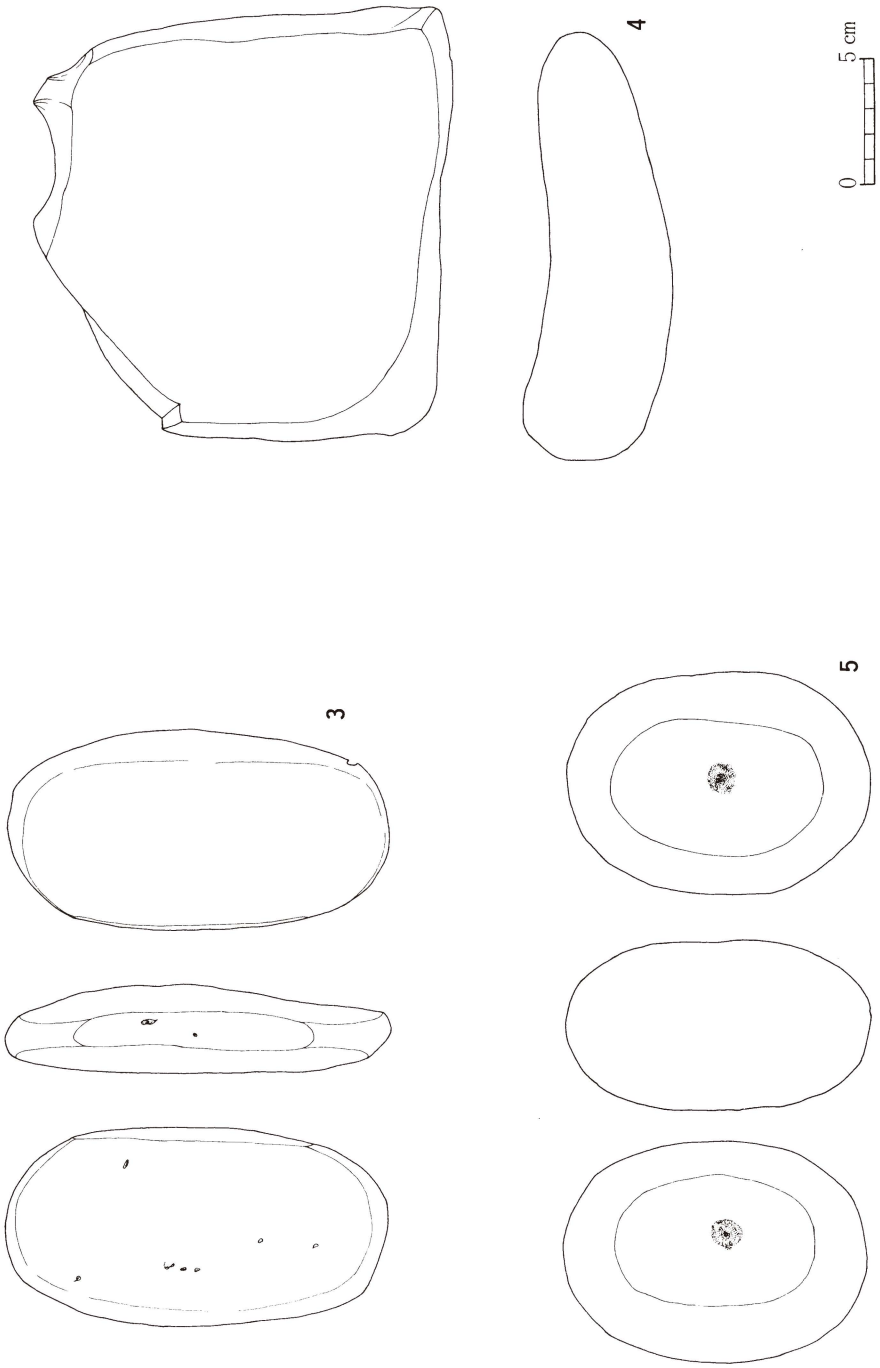
注18　沖縄県教育委員会『拝山遺跡』1987年



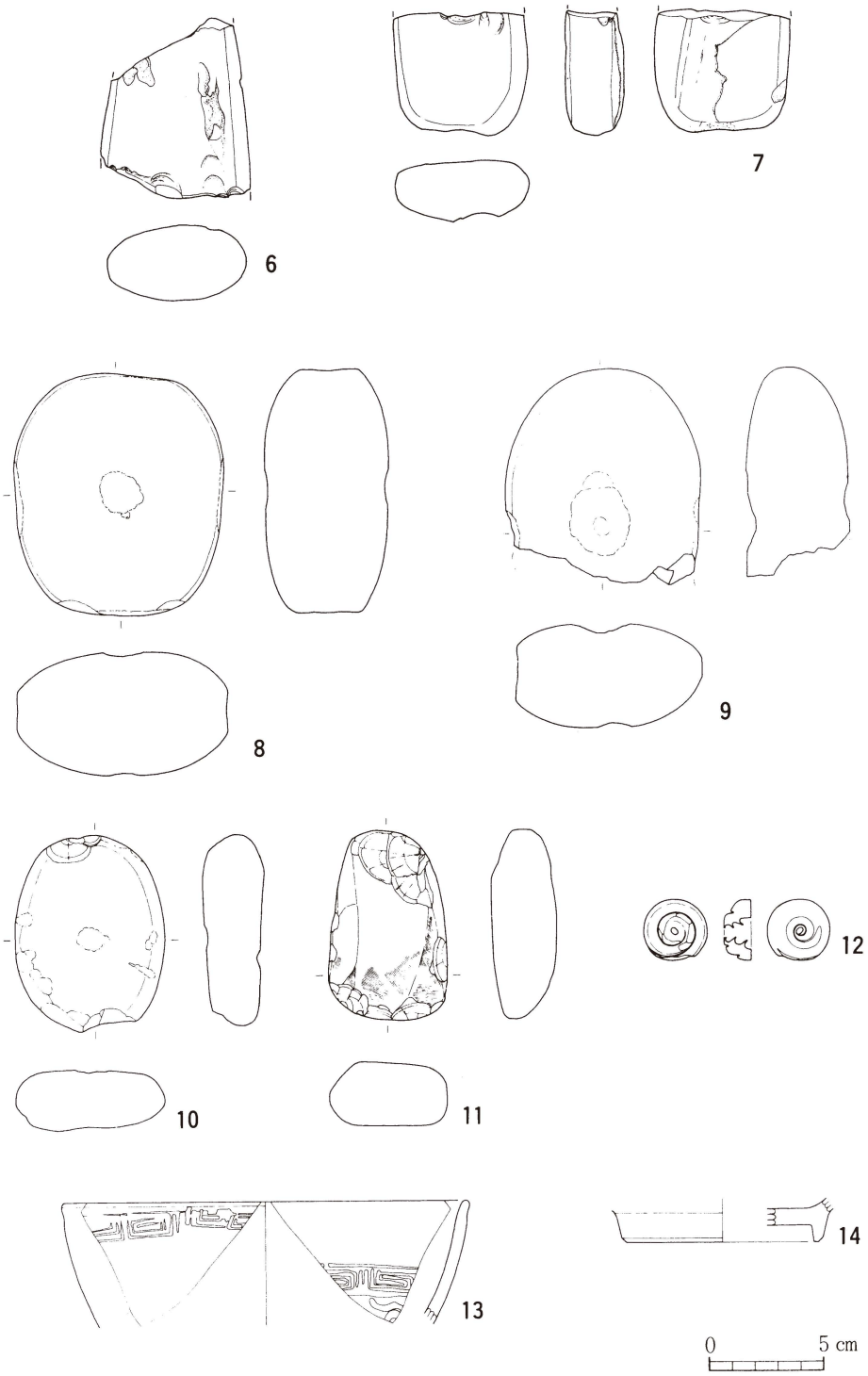
第14図　Ａ２区出土青磁



第15図　葺石に利用された石器(1)



第16図　葺石に利用された石器(2)



第17図　葺石に利用された石器(3)および葺石内出土貝製品・青磁

第４章　調査の成果と問題点

第４章　調査の成果と問題点

通称「ダンベ山」（植物名オオイタビ）と地元の方から呼ばれている宇宿貝塚東地区は、県道拡張に伴う発掘調査であった。宇宿貝塚の範囲が砂丘東側まで続いているかと思い、また関連する資料の出土が予想されたが、確認されたのは当初の予想とは全く違う中世の資料であった。

小さな砂丘を石で囲い、そのほぼ中央部分から人骨が出土した（第１号墓）。砂丘を囲む石に縄文～弥生時代の石器も含まれており、近くの宇宿貝塚（遺物包含層が露出して発見されており、現道も貝塚であったと思われる。昭和８年三宅宗悦宇宿貝塚から出土した石を利用したものと思われる。何の意で石を葺いたのかは不明であるが、ここが聖地として使われていたこと、後にノロ神やニタ神の祭場として使われていたこと、「アストホゾン」の神を祭って今でも信仰されていること等を考慮するならば、神山としての性格であることが理解出来る。

ただし、ノロ神やユタ神は琉球の影響によるものであるが、丘に石をめぐらし、その丘を墓地として使用する例はまだ沖縄でも例がないと聞く。古老などの話によると、ここからは「クビキレウァ」（首のない豚）や火の玉も出ると言われており、恐れられている。このような場所が後にノロ・ユタの祭り場として利用された可能性も残されている。宇宿貝塚の北側にある丘の上にはビーチロックやサンゴの箱形石棺墓もあり、古い墓地が存在する。このダンベ山からこの丘に墓地が移されたことも考えられる。第１号墓の近くから南宗時代（12末～13世紀）の青磁皿が出土していることからも、琉球がノロ神を奄美に送る時期よりも古い。奄美は琉球に支配されるまでは独自の「アジ」が存在していたことは間違いないだろう。奄美独自の祭場としての可能性が高いと考える。いずれにしろ今後の類例と民俗的立場からのアプローチが必要である。

第２号墓についてはⅢ層白砂層出土であり、やや古いと思われる。砂丘を掘り込んでその上にビーチロックの蓋石を置いてある。宇宿貝塚出土の女性人骨の出土状況と類似するが、副葬品の遺物が検出されていない。時代的にも宇宿貝塚出土人骨が弥生時代相当であると報告されており、時間差があるのかも知れない。ダンベ山における埋葬状態は奄美の古い墓制かもしれないが、それを明らかにするには葬式や宗教的儀礼、琉球と区別される異なったものなどの類例等が必要である。このような例のひとつとして、発掘調査で明らかになったことは大きな成果である。

今後の問題や研究視点について上述した通り、ノロ・ユタ以前の奄美のシャーマンや宗教的儀礼はどうなっていたのであろうか。グスクは沖縄よりも古いと言われており、沖縄と同様な奄美の「アジ」時代が存在していたことは間違いないだろう。その奄美のアジに

ついて文献や伝承が少ないことは、ノロ社会に入って重複していることも考えられる。全く沖縄と同様な「アジ」社会ではないと考えるからである。琉球文化と奄美文化を組み合わせた共存が14～15世紀のグスク時代とすれば、12～13世紀の奄美は、琉球・大陸・朝鮮も含めた交易関係を示さなければならないだろう。考古学的立場からの文化の概念として、それが交易関係でもたらされた出土品を中心として扱う場合は、一つの共通な行動様式の産物としての型式研究が必要である。いずれにしても奄美においてまだグスクそのものの調査が行われていない時点では問題外である。近々予定されている笠利町用安湊城の調査は、奄美における本格的なグスク調査であり、期待されるところである。

くどいようであるが、12・13世紀の奄美のグスク研究の成果によって、沖縄との関係も明らかになっていくであろう。この時代は、奄美のグスクのあり方や本遺跡のような類例のない祭場？等が出土した場合、琉球と全く共通とは言えないと考える。琉球の「アジ」の性格と奄美の「アジ」についても、とても興味深いものがある。

注19　白木原和美・田村晃一氏のご教示による。

第５章　付篇 奄美群島遺跡地名表

付篇　奄美群島の遺跡地名表

第3表　　奄美大島本島遺跡地名表 (1)

番号	遺跡名	所在地	備考
1	用見崎遺跡	笠利町用見崎	
2	用長浜遺跡	笠利町用長浜	
3	用遺跡	笠利町用安良川	
4	辺留城遺跡	笠利町辺留良川	
5	辺留窪遺跡	笠利町辺留窪	笠利町文化財報告No.6
6	コビロ遺跡	笠利町須野コビロ	〃
7	あやまる第2貝塚	笠利町須野大道	〃　No.9
8	あやまる第1貝塚	笠利町須野	
9	喜子川遺跡	笠利町松ノト	笠利町文化財報告No.13.14
10	マツノト遺跡	笠利町松ノト	〃　No.17
11	土盛遺跡	笠利町土盛	
12	宇宿小学校遺跡	笠利町宇宿	
13	宇宿高又遺跡遺跡	笠利町宇宿高又	笠利町文化財報告No.2
14	宇宿貝塚	笠利町宇宿大龍	〃　No.3
15	宇宿港遺跡	笠利町宇宿港	〃　No.4
16	万屋遺跡	笠利町万屋	
17	万屋下山田遺跡	笠利町万屋下山田	笠利町文化財報告No.16No.12
18	万屋泉川遺跡	笠利町万屋泉川	
19	ケジ遺跡	笠利町万屋ケジ	〃　No.6
20	長浜金久第2貝塚	笠利町長浜金久	鹿児島県教育委員会報告書No.32
21	長浜金久第1貝塚	笠利町長浜金久	〃
22	ナビロ川遺跡	笠利町和野ナビロ川	
23	立神遺跡	笠利町節田	
24	土浜遺跡	笠利町土浜	
25	イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴遺跡	笠利町土浜イヤンヤ	1973年三島格、永井昌文調査
26	明神崎遺跡	笠利町用安入瀬	
27	用安遺跡	笠利町用安入瀬	
28	サウチ遺跡	笠利町喜瀬字サウチ	笠利町文化財報告No.1

第4表　奄美大島本島遺跡地名表 (2)

番号	遺跡名	所在地	備考
29	鯨浜遺跡	笠利町喜瀬字鯨浜	
30	佐仁遺跡	笠利町佐仁	
31	宇宿貝塚東区	笠利町宇宿	笠利町文化財報告書No.18
32	土浜ヤーヤー遺跡	笠利町土浜	鹿児島県教育委員会報告書No.47
33	湊城遺跡	笠利町用安	
34	笠利ウーバル遺跡	笠利町笠利ウーバル	
35	赤尾木保育所遺跡	龍郷町赤尾木	
36	赤尾木遺跡	龍郷町赤尾木	
37	ウフタ遺跡	龍郷町赤尾木ウフタ	熊大考古学研究室活動報告No.12
38	手広遺跡	龍郷町手広	
39	瀬連遺跡	龍郷町芦徳	
40	龍郷金久遺跡	龍郷町龍郷	
41	前間遺跡	龍郷町龍郷	
42	白間遺跡	龍郷町龍郷	
43	中里遺跡	龍郷町龍郷	
44	外金久遺跡	龍郷町安木屋場	
45	三岸遺跡	龍郷町安木屋場	
46	円城遺跡	龍郷町円	
47	嘉渡グスムゴ遺跡	龍郷町嘉渡	
48	フージヤバル遺跡	龍郷町浦	
49	アオン浜遺跡	龍郷町戸口	
50	小湊長浜遺跡	名瀬市小湊	
51	小湊長浜遺跡	名瀬市小湊	
52	喜界ケ岳遺跡	住用村和瀬	
53	小和瀬遺跡	住用村和瀬	
54	サモト遺跡	住用村城	住用村文化財調査報告No.1・2
55	朝仁貝塚	名瀬市朝仁	名瀬市朝仁
56	朝仁天川遺跡	名瀬市朝仁	

第5表　奄美大島本島遺跡地名表 (3)

番号	遺跡名	所在地	備考
57	大浜貝塚	名瀬市大浜	
58	知名瀬遺跡	名瀬市知名瀬	
59	アメン浜遺跡	名瀬市根瀬部アメン浜	
60	国直遺跡	大和村国直	
61	湯湾釜遺跡	大和村湯湾釜	
62	毛陣貝塚	大和村大棚	
63	ヒエン浜遺跡	大和村戸円ヒエン浜	
64	宇検遺跡	宇検村宇検	
65	部連遺跡	宇検村部連	
66	屋鈍遺跡	宇検村屋鈍	
67	西古見遺跡	瀬戸内町西古見	
68	管鈍遺跡	瀬戸内町管鈍	
69	嘉徳集落遺跡	瀬戸内町嘉徳	
70	嘉徳遺跡	瀬戸内町嘉徳	
71	節子遺跡	瀬戸内町節子	
72	勝浦遺跡	瀬戸内町勝浦	
73	伊須遺跡	瀬戸内町伊須	
74	皆津崎遺跡	瀬戸内町皆津	
75	安脚場遺跡	瀬戸内町安脚場	
76	渡連遺跡	瀬戸内町渡連	
77	於斉遺跡	瀬戸内町於斉	
78	西阿室遺跡	瀬戸内町西阿室	
79	須子茂遺跡	瀬戸内町須子茂	
80	実久遺跡	瀬戸内町実久	
81	与路遺跡	瀬戸内町与路	
82	東城遺跡	住用村東域	
83	宇宿戦浜遺跡	笠利町万屋	笠利町文化財報告書No.15
84	節田湊金久遺跡	笠利町節田	笠利町文化財報告書No.16

第6表　喜界島遺跡地名表 (1)

番号	遺跡名	所在地	備考
1	八幡社境内小祠	喜界町	
2	下田の滝周辺	伊実久	
3	伊実久貝塚	伊実久伊林	
4	大城久遺跡		
5	伊佐一帯	伊佐	
6	アギ小森田遺跡		
7	前田遺跡		
8	上砂遺跡		
9	川堀遺跡		
10	中熊遺跡	中熊	
11	先内遺跡	先内	
12	地無田・能間		
13	柏毛遺跡		
14	上戸間遺跡		
15	ハンタ遺跡	西目半田	
16	島中遺跡	島中	
17	赤連遺跡	赤連	
18	浜川邸	赤連	
19	湾天神貝塚	湾中間	
20	総合グラウンド遺跡	中里	
21	中里貝塚	中里	
22	荒木小学校遺跡	喜界荒木	
23	荒木貝塚	喜界荒木	
24	荒木農道遺跡	喜界町荒木入山	
25	手久津久貝塚	喜界町手久津久	
26	上嘉鉄遺跡	喜界町上嘉鉄	
27	長嶺遺跡	喜界町長嶺	
28	平家森	喜界町早町上ケ田	

第7表　喜界島遺跡地名表 (2)

番号	遺跡名	所在地	備考
29	早町中学校遺跡	喜界町早田	
30	七城遺跡	喜界町志戸桶増ケダ	
31	川峰グスク遺跡	喜界町志戸桶	
32	坂元遺跡	喜界町志戸桶	
33	当地遺跡	喜界町志戸桶	
34	振川遺跡	喜界町志戸桶	
35	先山遺跡	喜界町先山蒲原	喜界埋蔵文化財報告書No.1

第8表　徳之島遺跡地名表 (1)

番号	遺跡名	所在地	備考
1	手々遺跡	徳之島町手々	
2	神田1遺跡	徳之島町神田	
3	山田遺跡	徳之島町山田	
4	トビヤ遺跡	徳之島町山田	
5	畦遺跡	徳之島町畦	
6	城畠遺跡	徳之島町城畠	
7	大当遺跡		
8	神之原アナダ遺跡		
9	ナーデン当遺跡		
10	坂元遺跡		
11	美代願山遺跡		
12	亀津南遺跡		
13	奥名川遺跡		
14	喜念上原遺跡	伊仙町喜念上原袋	
15	本川遺跡		
16	喜念原始墓	伊仙町喜念上原袋	
17	喜念貝塚	伊仙町喜念	
18	面縄按司城遺跡	伊仙町上面縄	
19	面縄第3貝塚	伊仙町面縄兼久原	

第9表　　徳之島遺跡地名表 (2)

番号	遺跡名	所在地	備考
20	面縄第4貝塚	伊仙町面縄兼久	
21	面縄第2貝塚	伊仙町面縄	
22	面縄第1貝塚	伊仙町面縄	
23	ミンツキタブク集落阯	伊仙町伊仙	
24	ヨフキ洞窟遺跡	伊仙町阿三	
25	犬田布貝塚	伊仙町犬田布	県指定
26	上成川遺跡		
27	西阿木名線刻礫	天城町西阿木名	
28	秋利神線刻岩	天城町瀬滝秋利神	
29	長竿遺跡	天城町瀬滝長竿	天城町埋文調査報告Ⅰ
30	千間遺跡	天城町大津川千間	
31	鍋窪	天城町兼久鍋窪	
32	塔原	天城町兼久塔原	
33	玉城	天城町天城真瀬名	
34	平土野原	天城町平土野平土野原	
35	大城	天城町松原大城山	
36	大久保	天城町天城大久保	
37	塩浜	天城町岡前塩浜	
38	オガミヤマ	天城町岡前オガミヤマ	
39	戸ノ木	天城町岡前戸ノ木	
40	オカゼン	天城町岡前	
41	尾志理田	天城町川津部	
42	馬塔遺跡	天城町岡前馬塔	
43	鬼入塔	天城町浅間鬼入塔	天城町埋文調査報告Ⅰ
44	中尾宮塔	天城町岡前オガミヤマ	
45	アガリン竿	天城町松原アガリン竿	
46	大城	天城町松原大城山	
47	カムイヤキ古窯群	伊仙町カムイヤキ	県指定

第10表　　沖永良部島遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	備考
1	美瀬浜	和泊町美瀬浜	
2	沖永良部空港	和泊町美瀬浜	
3	小野田	和泊町小野田	
4	西原宮志畑	和泊町小野田	
5	西原海岸	和泊町西原	
6	畦布	和泊町畦布	
7	湾仁屋	和泊町湾仁屋	
8	上畑	和泊町上畑	
9	小積原	和泊町小積原	
10	皆川	和泊町皆川	
11	古里	和泊町古里	
12	イクサィヨ洞穴	知名町余多石嘉喜	
13	石原遺跡	知名町余多石原	
14	赤嶺原遺跡	知名町赤嶺原	
15	中浦洞穴	知名町久志検水窪	
16	花城洞穴	知名町上平川花城	
17	前当遺跡	知名町上平川前当	
18	芦清良前兼久	知名町芦清良前金久	
19	永良部洞穴	知名町瀬利覚スマン辻	
20	塩津類ど遺跡	知名町屋子母塩津類ど	
21	川春遺跡	知名町屋子母川春	
22	泊り原遺跡	知名町屋子母泊り原	
23	当ノ増遺跡	知名町屋子母当ノ増	
24	屋子母遺跡	知名町屋子母植村	
25	スセン當貝塚	知名町屋子母スセン當	
26	神野貝塚	知名町大津勘神野	
27	大津勘フーダトウ遺跡	知名町大津勘神野	
28	大津勘フバト遺跡	知名町大津勘フダト	

第11表　沖永良部島遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	備考
29	木部蘭迫遺跡	知名町住吉木部蘭	
30	住吉貝塚	知名町住吉中金久	
31	友留遺跡	知名町住吉友留	
32	手殿遺跡	知名町住吉手殿	
33	正名内間遺跡	知名町正名内閣	
34	志良部当遺跡	知名町正名志良辺当	
35	田皆伊美畑遺跡	知名町田皆伊美畑	
36	上城遺跡	知名町下城先間他	
37	アンギム遺跡	知名町下城アンギム	
38	後蘭遺跡	和泊町後蘭	
39	仁志遺跡	和泊町仁志	

第12表　与論島遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	備考
1	茶花遺跡	与論町茶花	
2	古里遺跡	与論町古里	
3	立長ハギビナ遺跡	与論町古里	
4	城遺跡	与論町城	
5	太田氏宅散布地	与論町城	
6	朝戸遺跡	与論町朝戸	
7	麦屋遺跡	与論町麦屋	
8	ヤドシジョウ遺跡	与論町麦屋	
9	片岡氏宅散布地	与論町麦屋	
10	与論城	与論町城	
11	上城遺跡	与論町上城	

（奄美文化財保護対策連絡協議会副会長中山清美作成1993年３月現在）

笠利町宇宿貝塚東地区出土の人骨

峰　和治・竹中正巳・小片丘彦
（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座）

〔はじめに〕

平成４年４月、大島郡笠利町宇宿の県道拡張工事に伴って実施された遺跡確認調査で２体の人骨が出土した。調査地は国指定史跡・宇宿貝塚の東側に位置し、地元では「神山」として畏れられていた一画である。出土した２体（１号および２号人骨）は、砂地の土壙に埋葬されていた保存良好な人骨である。所属時代は、猫描文のある青磁片や土壙の層位から１号人骨が12～13世紀、２号人骨はそれよりもやや古い時期とみられている。奄美大島からの古人骨出土例としては、宇宿貝塚（松下、1979）や宇宿港遺跡（永井、1981）の弥生時代人骨がよく知られているが、それ以降の時期となると、近世人骨の調査例までかなりの時間的空白がある。沖縄の時代区分でいうグスク（城）時代に当たるこの時期の人骨資料は全国的にも報告例が少なく、今回の２例は、形質の地域差と時代変化を探るうえで貴重な情報を提供してくれるものと考えられる。また原埋葬の状態で出土したことは、当地の葬制、特に改葬の歴史を知るうえでも興味深い。以下、計測値と観察所見から両人骨の形質を概観した後、他の報告例との比較を行い、その特徴を検討した。なお、調査区域隣接地で別個体の足先部分が確認されたが、全身の発掘調査は見送られた。

〔人骨所見〕

１）１号人骨（女性・熟年）

出土状態：埋葬姿勢は仰臥で北西頭位。両脚を胡坐に組んでいる。右上肢は肘を屈曲して頭蓋の脇に手があり、左側は肘を軽く曲げて、腰椎の上に手を置く。脳頭蓋の腐食を除くと、ほぼ全身にわたって良好な保存状態である。

頭蓋：脳頭蓋は腐食によって相当部分に欠損がある。３主縫合の観察可能部分のうち、冠状縫合の内板が閉鎖している。頭蓋最大長は173㎜と短いが、最大幅が131㎜と狭く、長幅示数（75.7）は中頭型の下限にある。バジオンブレグマ高は計測不能で、前頭部から頭頂部にかけての死後変形も見られるが、観察では強い高頭性が窺える。外後頭隆起は突出せず、眉間と眉弓の高まりも見られない。鼻根部から鼻背にかけては平坦で、鼻骨平坦示数は20.8と小さい。顔面部は全体にサイズが大きく、Virchowの顔示数（115.2、66.7）も比較的大きな値をとる。歯槽側面角は62°と突顎である。非計測的小変異としては、翼上骨（右）、横頬骨縫合痕跡（左）、副眼窩下孔（左）、ベサリウス孔（左）が認められる。歯列の状態は次の通りである。

C_2

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7

咬合様式は鉗子状で、咬耗はMartinの１～２度。8 の近心隣接面歯頚部に２度の齲蝕が見られる。5 の頬側と遠心の歯槽頂に２個の硬組織片が埋入しているが、遊離可能な１個の肉眼観察からは、 Eの残存歯根と考えられた。上顎前歯部と下顎犬歯～第１大臼歯に、溝状のエナメル質減形成が各歯１～２本の割合で見られる。

体幹・体肢骨：体肢骨は全体に長径が長いが、骨幹はさほど太くない。上腕骨は三角筋粗面がよく発達し、骨体断面示数が左右とも66.7と扁平性を示す。上肢骨の長さに左右差が見られ、上腕・前腕とも右側の方がかなり長い。大腿骨体中央の柱状形成は認められないが、骨体上部は幾分扁平である。脛骨の栄養孔位断面示数は中脛に属す。下肢骨の長さに左右差は認められない。体肢骨近・遠位の最大長比をとると、前腕と下腿が相対的に長い。特に脛骨最大長：大腿骨最大長比は、この比率が大きいと指摘されている津雲縄文人の値（清野・平井、1928；平均値より算出）をも上回る。Pearson式で計算した推定身長は、左大腿骨最大長からは149.3㎝、左脛骨全長から153.1㎝、両者の単純平均は151.2㎝と高身長である。

体肢骨のほとんどの関節面辺縁には贅骨形成が見られる。左右大腿骨遠位関節面と膝蓋骨関節面、右上腕骨遠位関節面と尺骨鈎状突起の各対向部位に限局性の不整隆起がある。いずれも骨関節症の退行性変化と考えられる。全腰椎の椎体辺縁には顕著な骨棘形成が見られる。第２腰椎体上面にはSchmorl軟骨結節の深い陥凹が存在する。

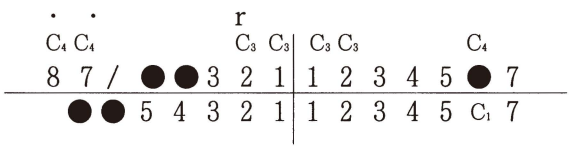
性･年齢：性別は骨盤と頭蓋の形状から女性と判定した。年齢は頭蓋縫合と歯の咬耗度および関節の退行性変化の進行度から熟年と推定した。

２）２号人骨（女性・壮年）

出土状態：人骨の上には板状のビーチロックが方形に配置されていた。埋葬姿勢は仰臥で南西頭位。両脚は膝を強屈して左方へ倒れる。右上肢は肘を直角に曲げて側腹部に手が位置し、左上肢は下方へ伸展している。全身の保存状態は良好である。

頭蓋：３主縫合に閉鎖は見られない。頭蓋最大長は178㎜と長いが、最大幅がやや広く、長幅示数（76.4）は中頭型に属す。バジオンブレグマ高は138㎜と高く、長高・幅高示数（77.5、101.5）は高頭・尖頭型に属す。外後頭隆起は突出せず、乳様突起は小さい。眉間と眉弓の高まりも見られない。鼻根部の陥凹は浅いが、鼻背の隆起は１号人骨よりも強く、鼻骨平坦示数は33.0である。顔高、上顔高ともにそれほど低いとは言えないが、中顔幅が広く（頬骨弓幅は計測不能）、Virchowの顔示数･上顔示数（109.8、63.7）は過低顔・過

低上顔型に属す。歯槽側面角は63°と突顎である。非計測的小変異としては、舌下神経管二分（左右）が認められる。歯列の状態は次の通りである。



/	：	歯槽骨破損
●	：	歯槽閉鎖
$C_{1\sim4}$	：	齲蝕（1～4度）
・	：	遊離歯
r	：	根尖部の病的骨欠損

咬合様式は鋏状で、咬耗はほとんどの残存歯が2度。生前喪失と齲蝕歯の多さが目につく。上下顎の前歯～小臼歯に浅い溝状のエナメル質減形成が各歯1～2本の割合で見られる。

体幹・体肢骨：上腕骨は三角筋粗面がよく発達し、骨体は扁平である（断面示数：右66.7、左68.2）。左右上腕骨肘頭窩に滑車上孔が見られる。大腿骨体の柱状形成は認められないが、骨体上部は扁平性を示す。脛骨の栄養孔位断面示数は厚脛に属し、扁平ではない。本個体では上･下肢骨ともに左側の方がやや長い。体肢骨近･遠位の最大長比は小さく、前腕と下腿は相対的に短い。推定身長は、左大腿骨から149.9㎝、左脛骨から149.3㎝となる。

第5胸椎～第4腰椎の椎体上下面にほぼ連続してSchmorl軟骨結節の陥凹が見られる。また第6、7胸椎体、第4腰椎体辺縁に骨棘が形成されている。

性・年齢：性別は骨盤と頭蓋の形状から女性と判定した。年齢は頭蓋縫合と咬耗の状態から壮年と推定した。

〔形質の比較〕

宇宿貝塚東地区から出土した2体の人骨はともに女性と判定された。共通する形質としては、長頭に傾く中頭、高頭性、歯槽性突顎、上腕骨の筋付着部の発達と扁平性、柱状形成を示さない大腿骨、扁平性が見られない脛骨、薩南諸島出土資料としては高身長である点などが挙げられる。しかし顔面部の高さ、鼻骨の平坦性、体肢骨近・遠位の長径比などには両者間に差が見られる。

薩南諸島出土の古人骨で、比較に堪える女性資料としては、宇宿貝塚の弥生人骨（松下、1979），徳之島面縄第1貝塚の弥生人骨（松下・石田、1983）、沖永良部島中甫洞穴の縄文人骨（松下、1984）各1例と種子島広田・鳥の峯遺跡の弥生人骨群（九州大学解剖学第2講座編、1988）がある。中甫縄文人を除いた弥生人は、強い短頭性と低身長傾向を示すことで概ね一致し、北部九州・山口地方に分布する高顔・高身長タイプの弥生人とは明らかに区別される。金関丈夫は種子島長崎鼻縄文人と薩摩半島成川弥生人および種子島広田弥生人との頭形の類似から、南九州の弥生人は当地方縄文人の継続であろうとの解釈を示し

たが（金関、1966）、宇宿貝塚、面縄第１貝塚、馬毛島椎ノ木遺跡（中橋・永井、1980）などの追加例によってこの考え方は補強されつつある。内藤芳篤は、金関が南九州弥生人の特徴として挙げた形質の中心は九州本土の南部ではなく、南の離島群であろうと推測し、「南九州離島弥生人」との呼称を提唱した（内藤、1984）。その後、沖縄本島および周辺の島々から同様の形質群をもつ縄文・弥生併行期の人骨を得た松下孝幸は、南島に共通した基本的特徴として新たに「南島基層タイプ」との呼び方もしている[1)]。

南島[2)]弥生人の形質的特徴の筆頭に挙げられる短頭性は縄文時代にまでさかのぼれるようであるが（松下、1992）、報告例が数多い近世以降の再葬人骨、いわゆる風葬骨の頭型はいずれも、中頭の半ばから長頭に傾く付近に分布する（大山、1956；他）。南島弥生人が示す極めて強い短頭性は、時代的にも地域的にも特異であり、その由来解明の手掛かりは得られていない。しかし、弥生時代と近世との間を埋める今回の２資料がいずれも短頭性を示していないことは、南島における頭型の時代変化を考えるうえで重要な意味をもつ。つまり、遅くとも12～13世紀には南島でも短頭という特徴が失われていた可能性がある。

ここで、脳頭蓋の保存のよかった宇宿貝塚東地区2号と他集団とのペンローズ形態距離を９項目の計測値から求めてみた（表10）。２号人骨との距離が小さいのは山口県吉母浜（中橋・永井、1985）と鎌倉材木座（鈴木、1956）の本土中世人および与論島（大山、1956）、徳之島（筆者ら、未発表）の近世人である。この関係は、同じ項目に基づいてマハラノビス距離を算出し、主座標分析によって各集団の位置を２次元に展開した図１でさらに明瞭となる。すなわち、２号人骨は本土中世人と南島近世人で作られるクラスターの中に含まれ、南島弥生人からは大きく離れる。本土中世人は汎日本的に、長頭、低顔、歯槽性突顎という時代的特性をもつと言われるが、宇宿東２号人骨はこのような頭蓋形態を備えている。百々（1992）は、奄美・沖縄近世人の頭骨形態小変異の出現頻度が縄文・アイヌにではなく弥生以降の日本人や東アジアのモンゴロイドに近いことを見いだし、その要因として歴史時代以降の日本本土や中国などとの頻繁な交流による遺伝子混合をあげている。宇宿貝塚東地区の２体は、顔面部形態などに多少の差があるものの、頭蓋と体肢骨の計測結果を総合すると、南島弥生人とは明らかに異なる形質を有している。これが百々の言うような遺伝子混合の結果だとすれば、既に中世以前の段階で、奄美人には形質変化が生じていたものと考えられる。

〔文献〕

百々幸雄　1992：形態小変異を読む・科学朝日　52（2）

金関丈夫　1966：弥生時代人・日本の考古学３．河出書房

清野謙次・平井　隆　1928：津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第３・４部・人類学雑誌　43

九州大学医学部解剖学第二講座（編） 1988：日本民族・文化の生成　2．六興出版
松下孝幸　1979：宇宿貝塚出土の人骨・「宇宿貝塚」笠利町文化財調査報告書
松下孝幸　1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人骨・「松之尾遺跡」枕崎市教育委員会編
松下孝幸　1984：鹿児島県知名町（沖永良部島）中甫洞穴出土の人骨・鹿児島考古18
松下孝幸　1992：貝塚に埋葬された縄文人・季刊考古学　41
松下孝幸・石田　肇　1983：鹿児島県伊仙町面縄第１貝塚出土の弥生時代人骨・伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書１．
永井昌文　1981：宇宿港遺跡出土の人骨について・「宇宿港遺跡」笠利町文化財報告　4
内藤芳篤　1984：九州における縄文人骨から弥生人骨への移行・「人類学－その多様な発展」日本人類学会編
中橋孝博・永井昌文　1980：椎ノ木遺跡出土人骨について・「馬毛島埋葬址－西之表市椎ノ木遺跡」熊本大学文学部考古学研究室編
中橋孝博・永井昌文　1985：人骨・「吉母浜遺跡」下関市教育委員会編
大山秀高　1956：鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究・人類学研究　3
佐熊正史　1986：中世九州人頭蓋の人類学的研究・長崎医学会雑誌　61
鈴木　尚　1956：鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨・岩波書店

【註】

[1] 宜野湾市文化財保護資料　№ 38「沖縄人のルーツを探る！」（1993）から。

[2] 本稿で言う南島は、現在までにある程度の古人骨資料が得られている南西諸島北部～中部圏をさす。

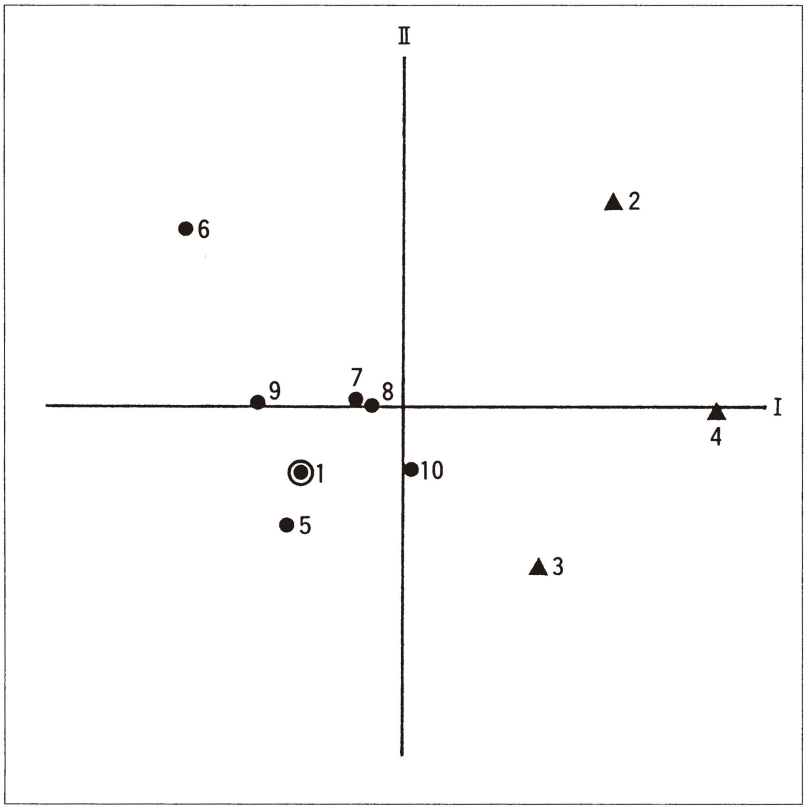


図1. マハラノビス距離の主座標分析

1. 宇宿貝塚東地区2号　2. 宇宿貝塚弥生　3. 面縄貝塚弥生
4. 広田弥生　5. 吉母浜中世　6. 松之尾中・近世
7. 徳之島近世　8. 世論島近世　9. 材木座中世
10. 南九州現代

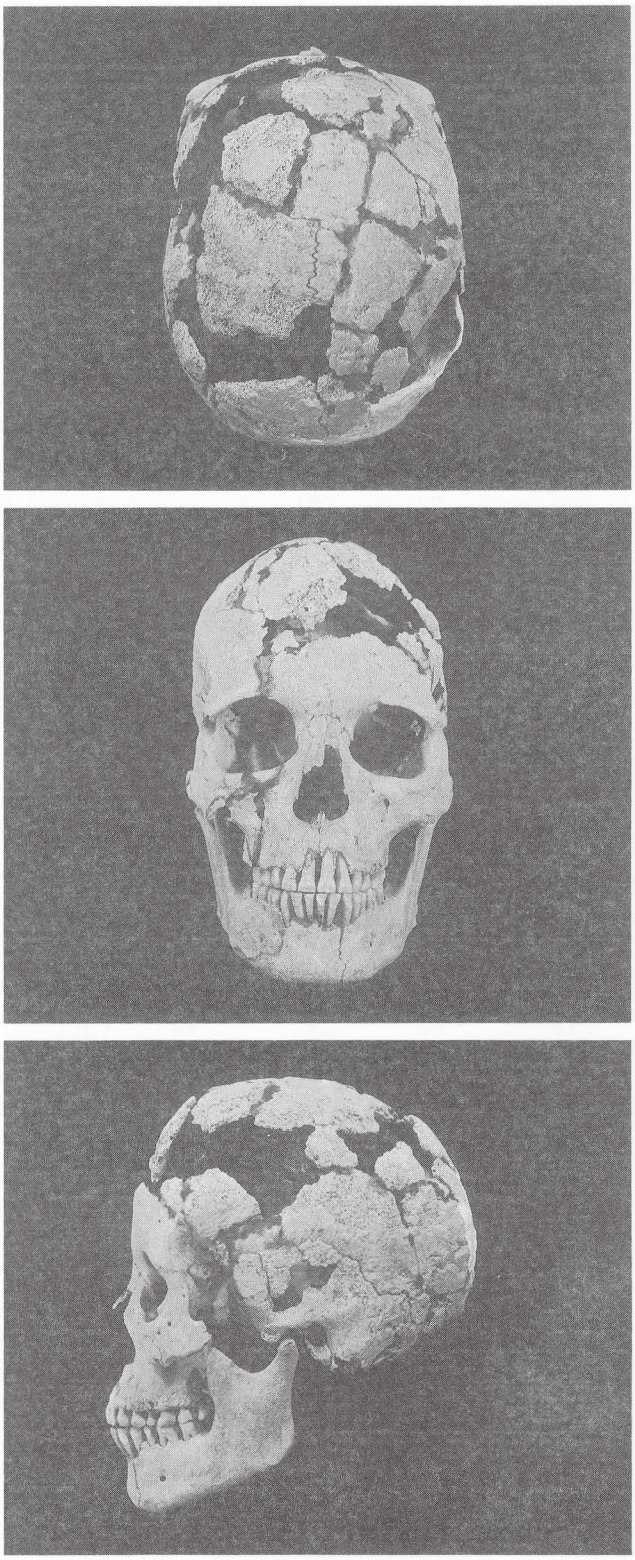


写真１．宇宿貝塚東地区１号人骨頭蓋（女性・熟年）

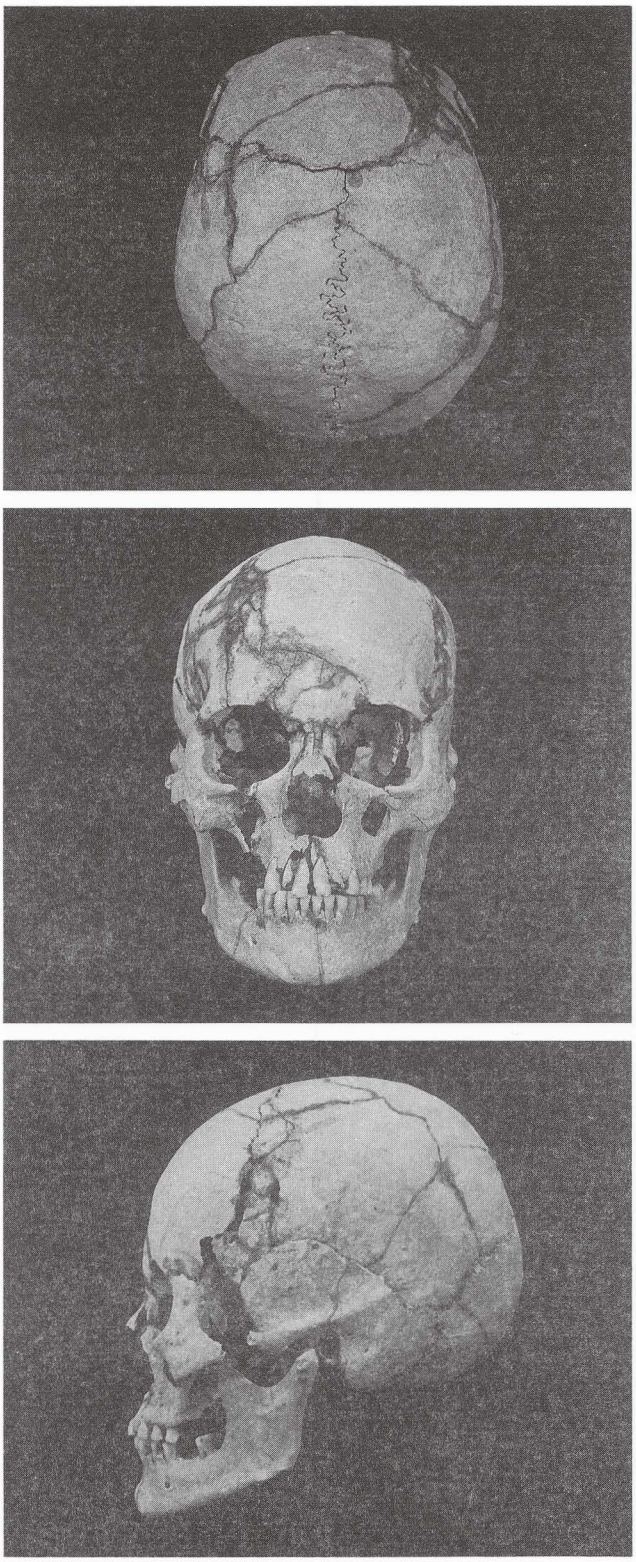


写真２．宇宿貝塚東地区２号人骨頭蓋（女性・壮年）

表１　脳頭蓋主要計測値の比較（女性）

Martin No.		宇宿貝塚東地区 1号	宇宿貝塚東地区 2号	宇宿貝塚（弥生）	面縄貝塚（弥生）	広田（弥生）	吉母浜（中世）
1	頭蓋最大長	173	178	170	165	159.7	176.4
8	頭蓋最大幅	(131)	136	149	136	144.4	132.0
17	Ba－Br高	－	138	130	130	127.5	133.0
8/ 1	頭蓋長幅示数	(75.7)	76.4	87.65	82.42	90.2	74.9
17/ 1	頭蓋長高示数	－	77.5	76.47	78.79	79.9	75.4
17/ 8	頭蓋幅高示数	－	101.5	87.25	95.59	90.4	100.7
5	頭蓋底長	－	100	89	95	95.8	98.0
9	最小前頭幅	102	91	－	90	97.8	91.4
23	頭蓋水平周	－	502	506	486	484.8	500.4
24	横弧長	－	304	317	304	311.9	303.1
25	正中矢状弧長	－	378	368	352	338.7	369.4
45	頬骨弓幅	〈134〉*	－	(135)	－	126.0	128.3
46	中顔幅	105	102	99	98	91.8	98.6
47	顔高	121	112	112	96	105.3	111.5
48	上顔高	(70)	65	63	61	62.0	65.5
47/ 45	Kollmann顔示数	〈90.3〉	－	(82.96)	－	81.1	86.3
47/ 46	Virchow顔示数	115.2	109.8	113.13	97.96	110.8	111.5
48/ 45	Kollmann上顔示数	〈52.2〉	－	(46.67)	－	47.9	51.6
48/ 46	Virchow上顔示数	(66.7)	63.7	63.64	62.24	65.3	66.5
51	眼窩幅　（左）	41	42	43	41	39.3	41.1
52	眼窩高　（左）	32	34	33	33	30.3	33.9
52/ 51	眼窩示数　（左）	78.0	81.0	76.74	80.49	77.7	82.7
54	鼻幅	25	26	26	29	24.8	25.9
55	鼻高	51	50	50	47	44.0	48.6
54/ 55	鼻示数	49.0	52.0	52.00	61.70	58.0	53.5
72	全側面角	80	83	79	76	84.7	82.8
74	歯槽側面角	62	63	69	77	65.7	61.8

＊：右側半を２倍した値

表 2　脳頭蓋主要計測値

Martin No.		1 号	2 号
1	頭蓋最大長	(173)	178
8	頭蓋最大幅	(131)	136
17	Ba－Ba高	－	138
8/ 1	頭蓋長幅示数	(75.7)	76.4
17/ 1	頭蓋長高示数	－	77.5
17/ 8	頭蓋幅高示数	－	101.5
1+8+17/3	頭蓋モズルス	－	150.7
5	頭蓋底長	－	100
9	最小前頭幅	102	91
10	最大前頭幅	－	111
11	両耳幅	115	128
12	最大後頭幅	111	109
13	乳突幅	－	115
7	大後頭孔長	－	34
16	大後頭孔幅	－	30
16/ 7	大孔示数	－	88.2
23	頭蓋水平周	－	502
24	横弧長	－	304
25	正中矢状弧長	－	378
26	正中矢状前頭弧長	－	125
27	正中矢状頭頂弧長	－	133
28	正中矢状後頭弧長	－	120
29	正中矢状前頭弦長	(117)	113
30	正中矢状頭頂弦長	－	118
31	正中矢状後頭弦長	－	101
26/ 25	前頭矢状弧示数	－	33.1
27/ 25	頭頂矢状弧示数	－	35.2
28/ 25	後頭矢状弧示数	－	31.7
29/ 26	矢状前頭示数	－	90.4
30/ 27	矢状頭頂示数	－	88.7
31/ 28	矢状後頭示数	－	84.2

表 3　顔面頭蓋主要計測値

Martin No.			1 号	2 号
40	顔長		108	96
45	頬骨弓幅		〈134〉	—
46	中顔幅		105	102
47	顔高		121	112
48	上顔高		(70)	65
47/ 45	Kollmann顔示数		〈90.3〉	—
47/ 46	Virchow顔示数		115.2	109.8
48/ 45	Kollmann上顔示数		〈52.5〉	—
48/ 46	Virchow上顔示数		(66.7)	63.7
43	上顔幅		111	104
44	両眼窩幅		100	97
50	前眼窩間幅		22	18
F	鼻根横弧長		26	21
50/ F	鼻根湾曲示数		84.6	85.7
51	眼窩幅	(右)	(42)	42
		(左)	41	42
52	眼窩高	(右)	(34)	34
		(左)	32	34
52/ 51	眼窩示数	(右)	(81.0)	81.0
		(左)	78.0	81.0
54	鼻幅		25	26
55	鼻高		51	50
54/ 55	鼻示数		49.0	52.0
57	鼻骨最小幅		12	7
60	上顎歯槽長		52	46
61	上顎歯槽幅		(68)	—
61/ 60	上顎歯槽示数		(130.8)	—
72	全側面角		80	83
73	鼻側面角		87	87
74	歯槽側面角		(62)	63
65	下顎頭間幅		(124)	126
66	下顎角幅		99	102
68	下顎体長		75	71
68(1)	下顎骨長		104	109
69	オトガイ高		37	33
69(3)	下顎体高	(右)	34	30
		(左)	33	29
69(3)	下顎体厚	(右)	14	12
		(左)	14	12
70a	下顎頭高	(右)	55	49
		(左)	55	48
70	下顎枝高	(右)	57	58
		(左)	61	56
71	下顎枝幅	(右)	38	35
		(左)	38	35
71/ 70	下顎枝示数	(右)	66.6	60.3
		(左)	62.3	62.5
79	下顎枝角	(右)	119	127
		(左)	119	129

＊:右側半を 2 倍した値

表 4　顔面平坦度計測

		1号	2号
前頭骨	弦	99.8	96.0
	垂線	15.0	14.9
	示数	15.0	15.5
鼻　骨	弦	12.0	6.9
	垂線	2.5	2.3
	示数	20.8	33.0
頬上顎骨	弦	105.1	100.8
	垂線	21.4	18.4
	示数	20.4	18.2

表5　頭蓋の非計測的小変異

	1号		2号	
	右	左	右	左
ランダム小骨＊	/		−	
ランダム縫合骨	/	/	−	−
インカ骨＊	−		−	
横後頭縫合残存(＞10㎜)	/	/	−	−
アステリオン小骨	−	−	−	−
後頭乳突縫合骨	/	/	−	−
頭頂切痕骨	−	−	−	−
冠状縫合骨	−	/	−	−
翼上骨	＋	/	−	−
前頭縫合残存＊	−		−	
眼窩上神経溝	−	/	−	−
眼窩上孔	−	−	−	−
前頭孔	−	−	−	−
二分頬骨	−	−	−	−
横頬骨縫合痕跡(＞5㎜)	−	＋	−	−
副眼窩下孔	/	＋	−	−
頬骨顔面孔欠如	−	−	−	−
口蓋隆起＊	−		−	
内側口蓋管骨橋	−	−	−	−
外側口蓋管骨橋	−	−	−	−
顆管欠如	/	/	−	−
後頭顆前結節	/	/	−	−
第3後頭顆＊	−		−	
後頭顆旁突起	/	/	−	−
舌下神経管二分	/	−	＋	＋
頚静脈孔二分	/	−	−	−
外耳道骨腫	−	−	−	−
フシュケ孔	−	/	−	−
ベサリウス孔	/	＋	−	−
卵円孔形成不全	−	−	−	−
翼棘孔	−	/	−	−
床状突起間骨橋	/	/	−	−
左側横洞溝優位＊	−		−	
副オトガイ孔	−	−	−	−
下顎隆起	−	−	−	−
顎舌骨筋神経管	−	−	−	−

＋：有，－：無，/ ：観察不能，＊：正中の形質

表 6　上肢骨主要計測値

Marin No.		1号 右	1号 左	2号 右	2号 左
上腕骨					
1	最大長	287	281	283	288
2	全長	283	277	277	282
5	中央最大径	21	21	21	22
6	中央最小径	14	14	14	15
7	骨体最小周	55	56	55	55
7a	中央周	59	60	59	61
6/ 5	骨体断面示数	66.7	66.7	66.7	68.2
7/ 1	長厚示数	19.2	19.9	19.4	19.1
橈　骨					
1	最大長	226	219	207	210
2	機能長	213	207	193	195
3	最小周	36	36	35	35
4	骨体横径	17	17	15	15
5	骨体矢状径	11	10	9	9
4a	骨体中央横径	16	16	13	14
5a	骨体中央矢状径	10	10	10	10
5(5)	骨体中央周	40	40	35	38
3/ 2	長厚示数	16.9	17.4	18.1	17.9
5/ 4	骨体断面示数	64.7	58.8	60.0	60.0
5a/ 4a	中央断面示数	62.5	62.5	76.9	71.4
尺骨					
1	最大長	240	234	227	230
2	機能長	213	207	197	200
3'	尺骨周	33	34	34	33
3	中央周	45	45	43	45
11	尺骨前後径	11	11	12	12
12'	尺骨横径	17	17	16	17
11	中央最小径	11	11	11	11
12	中央最大径	17	17	15	16
3/ 2	長厚示数	15.5	16.4	17.3	16.5
11/ 12	骨体断面示数	64.7	64.7	75.0	70
11'/ 12'	中央断面示数	64.7	64.7	73.3	68.8

表7　下肢骨主要計測値

Marin No.		1号 右	1号 左	2号 右	2号 左
大腿骨					
1	最大長	—	393	394	396
2	自然位全長	—	391	385	390
6	骨体中央矢状径	26	26	23	23
7	骨体中央横径	27	27	26	27
8	骨体中央周	81	81	75	78
9	骨体上横径	32	31	30	31
10	骨体上矢状径	23	23	21	22
8/ 2	長厚示数	—	20.7	19.5	20.0
6/ 7	骨体中央断面示数	96.3	96.3	88.5	85.2
10/ 9	上骨体断面示数	71.9	74.2	70.0	71.0
脛　骨					
1	全長	332	332	309	316
1a	最大長	336	336	314	320
8	中央最大径	28	28	27	27
9	中央横径	20	20	20	21
10	骨体周	75	74	72	73
8a	栄養孔位最大径	31	31	29	30
9a	栄養孔位横径	21	20	22	23
10a	栄養孔位周	83	82	80	83
10b	骨体最小周	68	68	67	66
9/ 8	中央断面示数	71.4	71.4	74.1	77.8
9a/ 8a	栄養孔位断面示数	67.7	64.5	75.9	76.7
10b/ 1	長厚示数	20.5	20.5	21.7	20.9
腓　骨					
1	最大長	327	327	309	—
2	中央最大径	18	18	15	15
3	中央最小径	11	11	12	12
4	中央周	45	45	45	46
4a	最小周	35	35	35	35
3/ 2	骨体中央断面示数	61.1	61.1	80.0	80.0
4a/ 1	長厚示数	10.7	10.7	11.3	—

表8　推定身長（Pearson式，cm）

Maritn No.	1号 右	1号 左	2号 右	2号 左
A：大腿骨最大長より	－	149.3	149.5	149.9
B：脛骨全長より	152.9	153.1	147.5	149.3
（A＋B）／2	－	151.2	148.5	149.6

表9　体肢骨長径比および周径比の比較（左）

	橈骨最大長：上腕骨最大長	脛骨最大長：大腿骨最大長	上腕骨最小周：大腿骨体中央周	腓骨中央周：脛骨骨体周
1号	78.0	85.5	69.1	60.8
2号	73.1	80.8	70.5	62.2

表10　宇宿貝塚東地区2号人骨からのペンローズ形態距離

宇宿貝塚弥生	1.9672
面縄貝塚弥生	1.4180
広田弥生	2.1699
吉母浜中世	0.2076
材木座中世[1]	0.3922
九州中世	0.4558
松之尾中・近世	1.1552
徳之島近世[2]	0.2618
与論島近世	0.5687
南九州現代[2]	0.5687

[1] 佐熊（1986），　[2] 筆者ら（未発表）

図　　版

図版1　遺跡調査前全景

1　北側より　左 東地区，右 宇宿貝塚

2　西側より　手前は宇宿貝塚

図版２　発掘区域調査前全景

１　遺跡 西側より 発掘前

２　東側より

1　葺石遺構　東側より

2　葺石遺構　西側より

図版４　葺石遺構全景（2）

1　葺石遺構　西側より

2　葺石遺構　３区

1　葺石に利用された石器出土状況

2　葺石に利用された石器出土状況

図版6　第1号墓全景

1　第1号墓人骨出土状況　東側より

2　第1号墓人骨出土状況　南側より

1　第２号墓出土状況

2　第２号墓出土状況　中央部分がくぼんでいる

図版 8　第 2 号墓全景(2)

1　第 2 号墓人骨出土状況

2　第 2 号基人骨出土状況

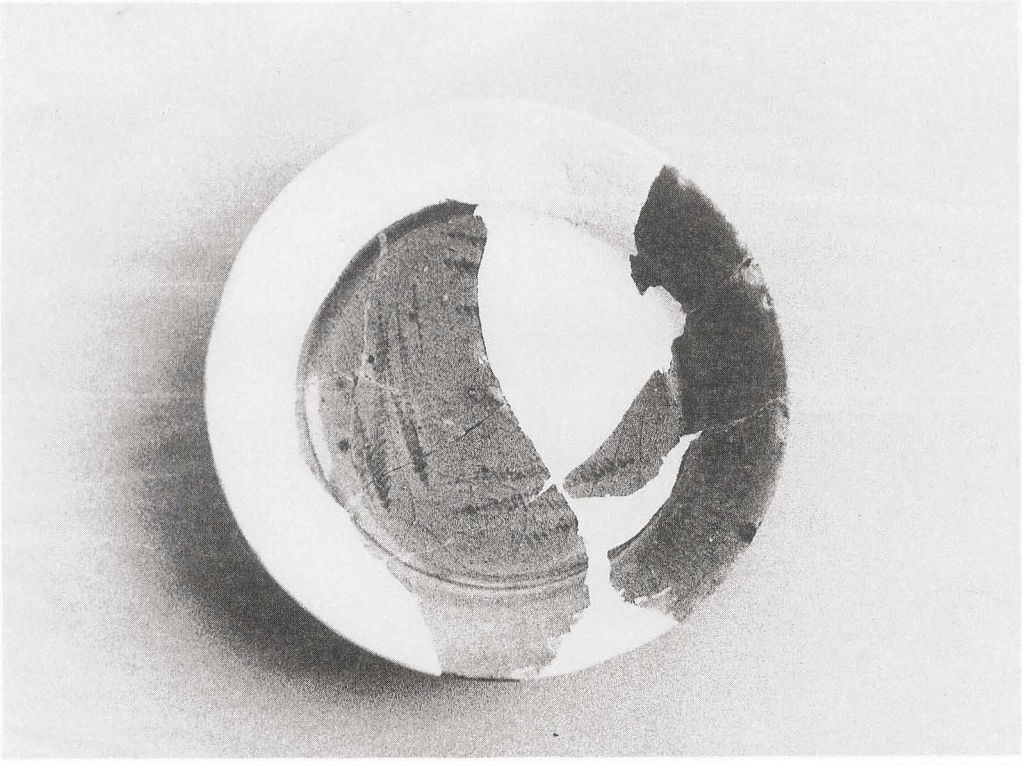
図版 9　発掘調査風景 (1)

1　発掘調査

2　雑木除去

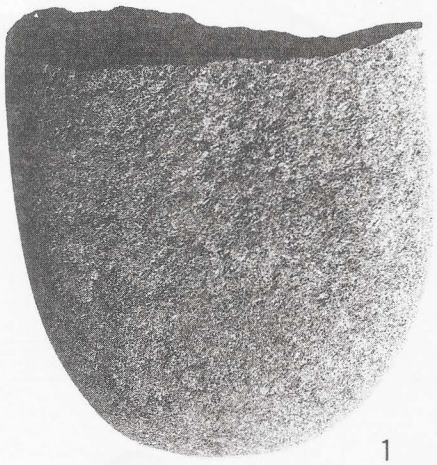
図版10　発掘調査風景(2)・Ａ２区出土遺物

1　Ａライン発掘



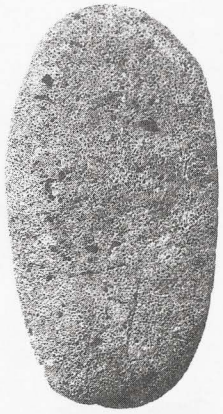
2　Ａ２区出土青磁皿

図版11　葺石遺構内出土遺物(1)

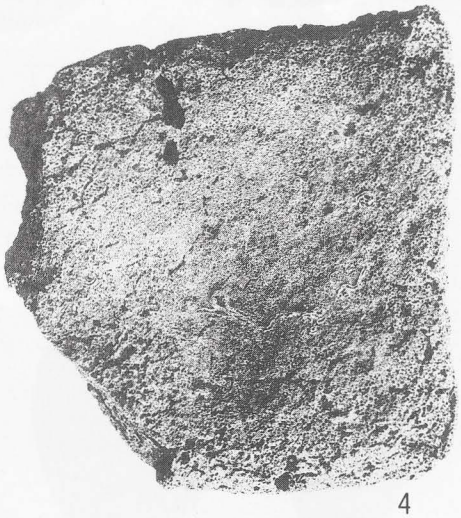


1

2

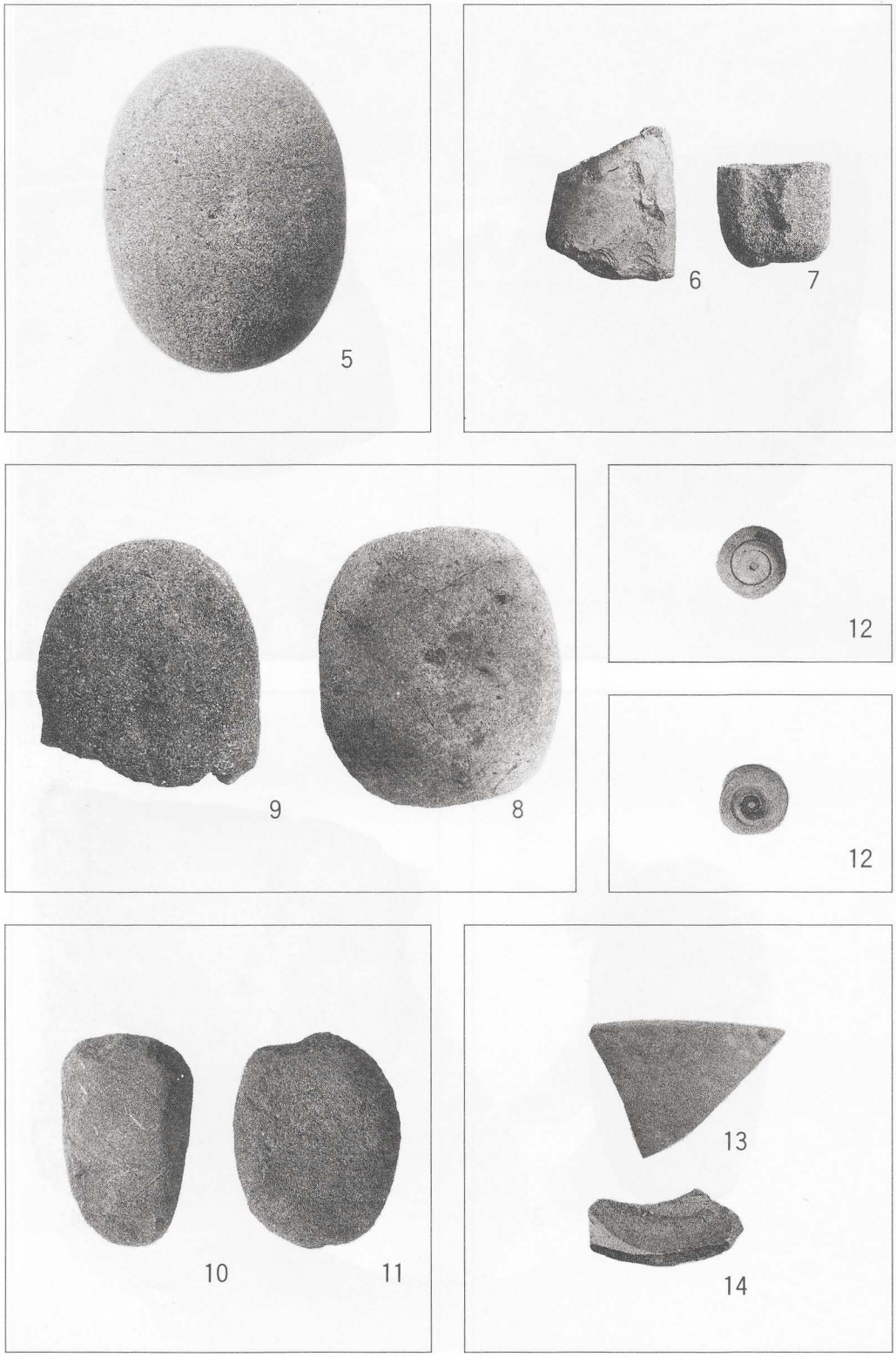


3



4

図版12　葺石遺構内出土遺物(2)



図版13　土盛集落入口遺跡確認調査

1　調査地区全景

2　確認調査風景

笠利町文化財報告第１８集

宇宿貝塚東地区（ダンベ山）

発行年月日：平成５年３月３１日
編集・発行：笠利町教育委員会
印　　刷：ト　ラ　イ　社
鹿児島市南林寺町12－6
TEL 0992－26－0815